

さいたま言語研究

第8号

【研究論文】

話し言葉「って」の使用に関する一考察
—提題用法に着目して—

尾藤眞裕・藤本珠笛 …1

植民地期台湾における二重否定形式の当為表現について
—『全国小学児童綴方展覧会』（1936）採録「綴方」を対象として—

上出大河 …15

【実習報告】

出会いの旅 友好の絆
—福建師範大学・埼玉大学学生文化交流活動イベント—

黒川美那子・庄佩珍・陳燕青 …29

2023 年度海外日本語教育実習報告
—福建師範大学での教育実習に参加して—

飯田来未・安倍千晴・梶日和・高橋あすみ …41

2023 年度海外日本語教育実習報告
—浙江工商大学での実習を通して—

藤本珠笛・尾藤眞裕 …46

【2023 年度研究大会】

研究大会の報告および発表の要旨

…55

2024 年 3 月

さいたま言語研究会

話し言葉「って」の使用に関する一考察

—提題用法に着目して—

尾藤眞裕・藤本珠笛

【キーワード】

話し言葉, 「って」, CEJC, 提題用法

【要旨】

本稿は、話し言葉の「って」について『日本語日常会話コーパス』を用いて使用実態を調査し、提題用法に着目してその特徴について分析を行ったものである。分析の結果、提題用法は引用、連体詞用法に次いで使用頻度が高く、提題用法の「って」は主に「は」「とは」「というのは」に置き換えられた。また、そのほかに「が」に相当するものも存在した。それぞれの置き換えパターンの特徴として、名詞に「って何」が接続する場合は「とは」に置き換えることができ、「というのは」に置き換えられる場合は、動詞や形容詞などの「文としての性質をもつもの」に後接するものが見られた。さらに、「は」に置き換えられる場合は、指示詞や人称代名詞といった「特定されたもの」に後接したものや丹羽（1994）における対比の文脈での「って」があり、「が」に相当する場合は動詞「いる」「ある」が後接するという特徴が挙げられる。これらの分析を踏まえ、日本語教育での提示に関する提案を行った。

1. はじめに

以下の(1)のように、「って」には「明日は晴れると聞いたよ。」のように引用を表わす助詞の「と」に相当するものがある。一方で、(2)の「って」は「確認は大切。」のように「は」に置き換えられ、提題を表わす表現である。

- (1) 明日は晴れるって聞いたよ。 (作例)
(2) 確認って大切。 (実例をもとにした作例)

また、提題を表す「って」が置き換えられるのは「は」だけではない。以下の(3)(4)はそれぞれ「とは」「というのは」に置き換えられる。

- (3) 献血ってどんなの？ (作例)
 (4) 「考える」って面白い。 (作例)

以上のように「って」には様々な用法があり、中でも提題用法においては、「は」「とは」「というのは」に置き換えられるものがある。劉（2023）はこのような「って」について、日本語母語話者にとっては使い勝手のいい表現形式であるが、学習者にとっては「厄介な」表現の1つであると言及している。

2. 先行研究

話し言葉の「って」に関するこれまでの研究は、大きく次のような系統に分けられる。

- ①由来について：湯沢（1957）、松村編（1971）、此島（1973）
- ②体系について：森重（1954）、グループジャマシイ編（1998）、三枝（2015）、劉（2023）
- ③許容度について：牧（1996）、朴（2006）
- ④その他（各用法の個別的な考察）：藤村（1993）、丹羽（1994）、森山（1995）、許（1999）、朴（2002）、岩男（2003）、守時（2007）

本稿と関わるものとして、使用実態については②の系統の中の三枝（2015）、劉（2023）が、提題用法については④の系統の中の丹羽（1994）が挙げられる。これらについて、次の2-1および2-2で詳しく取り上げる。

2-1 「って」の体系

以下では、「って」の体系に関する先行研究の記述を見ていく。「って」の体系について論じたものとして、三枝（2015）、劉（2023）を取り上げる。

2-1-1 三枝（2015）

三枝（2015）は、「って」の用法を、「文の中に現れる位置に対応させて」体系的に整理しており、それをまとめたものが以下の表1である。

三枝（2015）は、「って」の用法を「引用」「反復」「話題の引き込み」「伝聞」「言いつけ」「問い返し」「訴えかけ」「逆接」「主題の添加」「正当化」の10分類とし、全体像を示している。しかし、三枝（2015）の分類を日本語教育に応用する際、学習者がそれらの用法を援用して産出に活かすにはハードルが高いことが考えられる。また、「行くってば／ったら行くよ。」などの「ってば」「ったら」は日本語学的には「って」と連続的に捉えられるが、日本語学習者に指導する場合には「って」とは別に指導することも可能である。

表1 「って」の分化 (三枝 2015:141)

文の中での働き	接続詞 用法	係助詞 用法	接続助詞 用法	述語 用法	助動詞 用法	終助詞 用法
引用				すぐもどる <u>って</u> 出かけた。 行く <u>ったり</u> 行かない <u>ったり</u> 困る。 行く <u>って</u> ば/ <u>ったら</u> 行くよ。		
反復			寝たら <u>って</u> そうはいかない。 明日(だ) <u>って</u> 何が。			
話題の 引き込み		雨が降る <u>って</u> 困る。 子供 <u>って</u> おもしろい。 あの子 <u>ったら</u> やさしい。 あの子 <u>って</u> ばあわてない。				
伝聞					雨が降るんだ <u>って</u> 。 明日は雨だ <u>って</u> 。	
言いつけ					雨が降る, <u>だ</u> <u>って</u> 。 明日は雨だ, <u>だ</u> <u>って</u> 。	
問い返し					雨が降る <u>だ</u> <u>って</u> 。↗ 雨だ <u>って</u> 。↗	
訴えかけ					わかってる <u>って</u> 。 雨が降る <u>って</u> ば。 明日は雨だ <u>ったら</u> 。	
逆接			雨が降 <u>った</u> <u>って</u> 行く。 水だけだ <u>って</u> 生きられる。			
反発		私だ <u>って</u> 写せる。 雨だ <u>って</u> 必要だ。				
正当化					<u>だ</u> <u>って</u> , 知らなかった。	

2-1-2 劉 (2023)

劉 (2023) では、どのような表現が「って」に相当するかという言い換えの観点から、それぞれの用法について記述がなされている。表2は、劉 (2023) で記述されている用法と、その言い換え、例文の対応を表としてまとめたものである。

表2の「って」に相当する表現を見ると、いずれの用法においても「と(波線部)」を持ち、「いう」または言語思考に関わる動詞が続くという点で共通しており、用法間の連続性が見られる。学習者に提示する際、このような用法間の連続性を示すことで、「って」の各用法の理解のしやすさに繋がると考えられる。

表2 劉（2023）における6つの用法

用法	「って」に相当する表現（言い換え）	例文
引用	「と」 （後続する動詞は「言う」「思う」「聞く」「呼ぶ」 「勧める」等言語思考行為に関わるものが多い）	魔法 <u>って</u> 言っていていいかな？
伝聞	「 <u>と</u> 言っている」	桐島、部活やめる <u>って</u> よ
話し手自身の 自覚・決意	「 <u>と</u> 思った」「 <u>と</u> 決めた」	自分はなんて子供なんだろう <u>って</u>
連体詞	「 <u>と</u> いう」	君 <u>って</u> 人は本当に困ったもんだね
提題	「 <u>と</u> いう」「 <u>とは</u> 」「 <u>は</u> 」	君 <u>って</u> 君 <u>って</u> 泣いたりしないんだね 結局、言論の自由 <u>って</u> 何？
念押し	「すでに <u>と</u> 言っている」 「すでに <u>と</u> 示しただろう」	分かった <u>って</u> ！

以上のような日本語教育の観点から、本稿では劉（2023）の枠組みを用いて用例の分析を行うこととする。また、提題の「って」に着目すると、劉（2023）では相当する表現として「という」「とは」「は」が一括して挙げられており、その使い分けが示されていない。そこで、本稿では特にこの提題用法に着目し、その特徴を記述すると共に、学習者への提示のポイントについて検討することを目的とする。

2-2 「って」の提題用法

続いて、「って」の提題用法についての先行研究を見ると、丹羽（1994）は、主題を提示する「って」について分析しており、それらは大きく次の2つに分けられると説明している。一つは、(5)のように「言葉を再現して主題として提示する用法」のもので、二つ目には、(6)のように「『は』に似た通常の主題提示を表すと言える用法」（p.102）が挙げられている。

(5) 「MMCにしよう。」「MMC って何？」 (丹羽 1994:80 (2) a)

(6) 人間って愚かなものだ。 (丹羽 1994:80 (2) b)

さらに、(7)のように「って」自体は対比の意味を表さないが、(8)の「って」では「は」に置き換えられることを示し、このように「主題を含む文が対比性を帯びる」場合には、「って」が用いられることがあると説明している（p.92）。

(7) 太郎 {って／は} 帰ってくれ。 (丹羽 1994:92 (17) a)

(8) 次郎ってわりとぼんやりしてるけど、太郎は抜け目がないね。
(丹羽 1994:92 (18) b)

しかし、1章で述べたように、主題を提示する「って」には、「は」以外にも「とは」「というのは」に置き換えられるものがあり、その点について丹羽（1994）では詳しい分析がなされておらず、なお検討の余地がある。

以上のように、従来の研究では「って」が様々な用法を持つことが指摘されているが、その中でどの用法が多く使われるのかといった実際の使用実態については明らかにされていない。さらに、提題用法における「って」には、「は」「とは」「というのは」に置き換えられるものがあり、従来の研究ではその違いについて論じられていない。

そこで、本稿では話し言葉における「って」について、以下の2点を研究の目的とする。まず、①コーパスにおける実例に基づいて整理し、使用実態を明らかにすること、そして、②提題用法の「って」の特徴を明らかにすることを目指す。また、これらの分析結果を踏まえ、日本語教育での提示についても検討する。

3. 調査方法

本調査には、『日本語日常会話コーパス』（CEJC）¹を使用データに選定した。コーパス検索アプリケーション『中納言』を用いて用例を抽出し、その際、すべての年代、すべてのレジスターを対象とした。具体的には、『中納言』の短単位検索で、1) キー「指定しない」、2) 後方共起「語彙素：って」、「品詞：助詞—副助詞」を入力し、検索した。検索の結果、得られた29,325例からランダムに1,000例を抽出し、これらを調査対象とした。また、調査対象となった各例を目視し、用例の分析を行った²。

用例における意味用法の分類については、劉（2023）の枠組みを参考にした。はじめに、得られた用例を100例ほど確認し、大まかに分類を行った。その後、観察する用例を増やし、すべての用例を分類した。分類結果の詳細については、4章で述べる。

4. 調査結果

2章で述べた通り、本稿では日本語教育の観点から劉（2023）の枠組みを採用し、それに沿って「って」の用法を【引用】【連体詞】【提題】【自覚】【伝聞】【念押し】の6つに分類することとする。以下、頻度順に6用法の例³をそれぞれ挙げる。

まず、【引用】は(9)(9)'のように、「って」を「と」に置き換えられるものである。【引用】の場合には、(9)の「ゆってた」のように、「って」の後ろには「言う」等の思考動詞が接続する。

¹ 日常場面で自然に生じるリアルな会話を対象とし、多様な場面・多様な話者の会話200時間分がデータとして収録されているコーパス。(国立国語研究所 ninjal.ac.jp)

² 以下の「なんて」のような誤解析の用例も見られたため、それらを除去し、考察対象を抽出した。

・だから合奏だけやっているとだってさなんてゆうの結局 (T010_004, 110570)

³ 各用例に CEJC での会話 ID と開始位置を付す。また、話者を示す記号や下線は筆者によるものである。

- (9) A: うん
 B: ゆってた 十五分 うん 五分やと短いってゆってた (T024_001, 23180)
 (9)' B: ゆってた 十五分 うん 五分やと短いとゆってた (作例)

次に、【連体詞】は「って」の後ろに名詞が接続するものである。(10)は「って」の後に名詞「子」が続く例であり、(10)'のように「って」を「という」に置き換えることができる。

- (10) A: なんでそんな安いの
 B: わかんないけど 悠人って子が教えてくれた (K002_014, 4170)
 (10)' B: わかんないけど 悠人という子が教えてくれた (作例)

また、【提題】はトピックを提示する役割を持つものである。(11)は田舎の高校の実態について会話している場面であり、「進学校」がトピックとなっている。(11)'のように、【提題】における「って」は「は」に置き換えることができる。

- (11) A: そうだよな 行けるところが限られちゃうもんね
 B: 進学校ってこの区域だどこことこことって (T011_014, 86900)
 (11)' B: 進学校はこの区域だどこことこことって (作例)

【自覚】は、話し手が思った内容に「って」が接続するものである。(12)はハワイで車を持つことについて会話している場面であり、「車を所有しているとお金がかかるため、持たないことにした」ことを表している。【自覚】の場合は、(12)'のように「って」を「と思った」に置き換えることができる。

- (12) A: 車を持ったらこれぐらいと思ったらまあ車をもううちらだから持つのはやめようって (T021_008, 124800)
 (12)' A: 車を持ったらこれぐらいと思ったらまあ車をもううちらだから持つのはやめようと思った (作例)

次の(13)は、【伝聞】の例であるが、【伝聞】は他者からの得た情報に「って」が接続するものである。(13)は地方テレビのスポンサー権について話している場面であり、Aは「安く買えるらしいですよ」と言った後、「むちゃくちゃ安く買えるって」と再度発言している。(13)の「って」は(13)'のように「と聞いた」への置き換えが可能である。また、この場合は「と言っている」という意味にも捉えられる。

- (13) A: 地方のなんか番組権結構安く買えるらしいですよ 番組権 地方テレビのスポンサー権

B: あー そうゆうことね

A: むちやくちや安く買えるって (K007_008, 95420)

(13)' A: むちやくちや安く買えると聞いた (作例)

最後に、【念押し】は自分の意見を押し付ける意味合いを持つものである。(14)は睡眠薬を飲むタイミングについて、ある人物に対して言いつける場面での発話であり、(14)'のように「って」を「と言ってるだろ」に置き換えることができる。

(14) A: 初めて飲むなら家で飲めって (T015_017, 55020)

(14)' A: 初めて飲むなら家で飲めと言ってるだろ (作例)

以上の6用法について、用法ごとの用例数の全体像をまとめたものが以下の表3である。表3から、【引用】が781例中391例と最も多いことがわかる。また、【提題】も167例と、【引用】【連体詞】に次いで使用が見られた。このことから、学習者に対して【提題】における「って」の理解・産出を促すことの重要性が窺える。

表3 「って」の用法と用例数

順位	「って」用法	置き換え	用例数
1位	引用	と	391
2位	連体詞	という	175
3位	提題	は、とは、というのは	167
4位	自覚	と思った	25
5位	伝聞	と聞いた、と言っていた	20
6位	念押し	と言ってるだろ	3
合計			781

5. 分析

4章では、【提題】の用例が【引用】【連体詞】に次いで多く見られた。【提題】は、「は」「とは」「というのは」に置き換えられることが多いが、従来の研究ではその違いについて言及されていない。本稿では5-1, 5-2, 5-3でそれぞれの特徴について分析していく。このほか、「は」「とは」「というのは」以外に「が」に相当するものも見られたため、5-4において詳述する。

5-1 「とは」に置き換えられるもの

以下の(15)(16)のように、名詞に「って何？」が接続するものは、「って」を「とは」に置き換えることができる。例えば、(15)では「スイッチ」について、(16)では

「り」という表現について、それが何であるかを尋ねる際、「って何」という形が用いられている。この場合、「って」は「とは」に置き換えられる。

- (15) A: スイッチって何 (K009_003, 117030)
 (15)' A: スイッチとは何 (作例)
 (16) A: あたし誰かに聞いて えー ね 何それ りって何みたいな (K002_012, 12280)
 (16)' A: あたし誰かに聞いて えー ね 何それ りとは何みたいな (作例)

5-2 「というのは」に置き換えられるもの

以下では、「というのは」に置き換えられる場合の特徴を見ていく。「というのは」に置き換えられる場合の「って」の前接部分に着目し、以下の3点を特徴として挙げる。

5-2-1 「動詞＋「って」」

まず、以下の(17)のように、動詞に「って」が接続するものは、「って」を「というのは」に置き換えることができる。Bの発話では、「キャストが来ることができない」ことについて「つらい」という評価をしており、動詞「来れない」の後ろに「って」が接続している。

- (17) A: 来れない三人はコ あの当時まだ入部してなかったからな
 B: キャスト来れないってつらくねえ (W002_001, 108530)
 (17)' B: キャスト来れないというのはつらくねえ (作例)

5-2-2 「形容詞＋「って」」

また、以下の(18)のように、動詞だけでなく形容詞に「って」が接続するものも「というのは」に置き換えることができる。(18)は歯科医院で定例打合せをしている場面であり、診療室内の助手の人数について話をしている。形容詞「言いにくい」の後ろに「って」が続いており、このような「って」は「というのは」に置き換えられる。

- (18) A: 一人だけ診療に付いてるって時になるとあ言いにくいってアあるけど (W004_007b, 24450)
 (18)' A: 一人だけ診療に付いてるって時になるとあ言いにくいというのはアあるけど (作例)

5-2-3 「名詞＋「に」＋名詞＋「って」」

他にも、以下の(19)(20)のように、「～に～」という形式に「って」が接続する例も「というのは」に置き換えることができる。これらは、それぞれ「つくねに生卵をつ

ける」「ネイビーにオレンジを組み合わせる」というように、「～に～」の後に述語が省略されているものと考えられる。

- (19) A: つくねに生卵ってどうやって食うの (T024_003a, 26750)
 (19)' A: つくねに生卵というのはどうやって食うの (作例)
 (20) A: なんかさあれだねネイビーにオレンジって合うんだね (T011_007, 180)
 (20)' A: なんかさあれだねネイビーにオレンジというのは合うんだね (作例)

このように、(17)は動詞に、(18)は形容詞に、(19)(20)は「述語が省略されている形」に「って」が接続する用例であり、いずれも「というのは」に置き換えることができる。動詞、形容詞、述語が省略されている形というのは、文の成分となるものであり、「文としての性質をもっている」ものと言える。以上から、「って」を「というのは」に置き換えられるものの特徴として、「って」の前接部分が「文としての性質をもっている」ことが考えられる。

5-3 「は」に置き換えられるもの

続いて、「は」に置き換えられるものの特徴について見ていく。「は」に置き換えられる場合には、以下の4つの特徴が挙げられる。

5-3-1 「指示詞+「って」

まず、(21)(22)のように、指示詞に「って」が接続するものは、「って」を「は」に置き換えることができる。(21)は指示詞「これ」に「って」が接続する例であり、「って」を「は」に置き換えることができる。

- (21) A: これってオーナーになったら修正できる
 B: できるとお思います (W001_004, 170360)
 (21)' A: これはオーナーになったら修正できる (作例)

また、(22)も同様に、指示詞「それ」に接続した「って」は、「は」に置き換えることができる。

- (22) A: だ僕は従業員だけは恵まれたってゆわれて それって逆を返すと会長がいいからみんな付いてくるわけですよ (T021_006, 52700)
 (22)' A: だ僕は従業員だけは恵まれたってゆわれて それは逆を返すと会長がいいからみんな付いてくるわけですよ (作例)

5-3-2 「人称代名詞+「って」」

また、以下の (23) のように人称代名詞に「って」が接続するものも「は」に置き換えることができる。(23) は「彼」についてクラフトビールが飲めるかどうかを尋ねる場面での発話であり、「って」を「は」に置き換えることができる。

- (23) A: 彼ってきクラフトビールとか飲む人 (K005_016, 12850)
 (23)' A: 彼はきクラフトビールとか飲む人 (作例)

(24) も同様に、人称代名詞「わたし」の後に「って」が続く例であり、「って」は「は」に置き換えられる。

- (24) A: わたしって興味持たれてないんだよね (K003_005, 104200)
 (24)' A: わたしは興味持たれてないんだよね (作例)

5-3-3 「人名+「って」」

そして、人名に「って」が接続する場合も「は」に置き換えることができる。(25) は「琴ちゃん」という人物の話題であり、人名の後ろに「って」が続く。このような例は (25)' のように「は」に置き換えることができる。

- (25) A: 琴ちゃんってイ今はスあのウズベキスタンなの (K008_016, 33940)
 (25)' A: 琴ちゃんはイ今はスあのウズベキスタンなの (作例)

以下の (26) も同様に、「耕一くん」という人名の後に「って」が接続しており、このような「は」に置き換えることが可能である。

- (26) A: で今度あの耕一くんて覚えてる
 B: うん んー なんとなく
 A: あれが鳥取に単身赴任なったから (T020_010b, 15650)
 (26)' A: で今度あの耕一くんは覚えてる (作例)

このように、指示詞、人称代名詞、人名に「って」が接続するものは、「は」に置き換えられる。以上から、「は」に置き換えられるものの特徴の一つとして、「って」の前接部分が「特定されたもの」であることが考えられる。

5-3-4 対比の文脈

さらに、「は」に置き換えられるものとして、丹羽 (1994) でも述べられているように、対比の文脈で用いられる「って」が挙げられる。以下の (27) の「向こう」は中国

を指しており、「中国」と「日本」が対照的に取り上げられている。

- (27) A: 留年もあるわけ 向こうは
B: あーあーあー
A: で日本て留年ないじゃないっすか (T018_021, 96300)
(27)' A: で日本は留年ないじゃないっすか (作例)

また、(28)は「駒場」のスタジアムには「陸上専用のトラック」があるのに対し、「大宮」のスタジアムにはそれがないことが述べられている。「駒場」と対比した「大宮」の後ろに「って」が続いており、このような「って」は「は」に置き換えられる。

- (28) A: 駒場もねあれトラックがあったから遠いんだよ ハ あー あの陸上競技用のトラックがあるが
B: うん うん
A: 大宮ってサッカー専用のスタジアムだから真四角なんだよね (S002_004, 190600)
(28)' A: 大宮はサッカー専用のスタジアムだから真四角なんだよね (作例)

このように、(27)(28)どちらも「対比」の意味が含意されており、このような場合も「って」を「は」に置き換えることができる。

5-4 「が」に置き換えられるもの

劉(2023)は以下の(29)を挙げ、「って」を「が」に置き換えられる例について言及している。本稿においても(29)と同様に、「って」を「が」に置き換えられる例が見られた。それが(30)である。(30)の「って」も(30)'のように「が」に置き換えることが可能である。このような「が」に置き換えられる場合について(29)(30)を見てみると、共通する特徴として「って」の後ろに動詞「いる」が接続していることがわかる。このように、動詞「いる」が後接する場合、「って」を「が」に置き換えることができる。

- (29) ピーマンが嫌いな子っているじゃないですか (劉 2023)
(29)' ピーマンが嫌いな子がいるじゃないですか (作例)
(30) A: 戻さないでそこへそこへ置いちゃう人っているじゃないですか (K009_014, 19520)
(30)' A: 戻さないでそこへそこへ置いちゃう人がいるじゃないですか (作例)

また、以下の(31)は子育てについて会話をしている場面での発話であるが、「って」

の後ろに動詞「ある」が接続している。この場合、(31)' の「タイミングがある」というように「が」に置き換えることができる。以上から、動詞「いる」「ある」が「って」の後に接続する場合、「って」を「が」に置き換えられると言える。

(31) A: その子のタイミングって絶対あるからね (C002_014b, 28740)

(31)' A: その子のタイミングが絶対あるからね (作例)

5-5 分析のまとめ

以上のように、本稿では【提題】の「って」が「とは」「というのは」「は」「が」に置き換えられるものの特徴について考察を行った。それぞれの特徴をまとめると、以下の通りである。まず、「とは」に置き換えられるものとして、名詞に「って何」が接続するものが挙げられる。また、動詞や形容詞などの「文としての性質をもつもの」に後接する場合は、「というのは」に置き換えられる。この「文としての性質をもつもの」の中には、述語が省略されている場合も含まれる。さらに、「は」に置き換えられるものには、指示詞や人称代名詞、人名などの「特定されたもの」に後接したものと、丹羽(1994)で述べられているような対比の文脈で用いられる「って」が挙げられる。また、「が」に置き換えられるものには動詞「いる」「ある」が後接していることがわかった。

このような【提題】の用例の置き換えについて、用例数の分布を示すと表4のようになる⁴。【提題】の「って」において、「は」「というのは」に由来するものが最も多く見られ、「とは」や「が」に置き換えられるものも一定数見られるという結果となった。

表4 【提題】の置き換えと用例数

置き換えられる語	用例数
は・というのは	76
は	37
というのは	19
は(対比)	14
とは	9
が	9
とは・というのは	3
に	1
合計	168

⁴ 以下のように、「って」を「に」に置き換えられる用例が1例見られた。この場合は、「でも意外とはまる女子ってそうなんじゃないですか格闘技とかって」になると考えられ、発話で「って」を先走って言っていると考えられる。

・A: 俺逆にゆうとどこまでピュアなんだと思うよ

B: でも意外と格闘技とかってはまる女子ってそうなんじゃないですか

(T008_010, 49130)

6. おわりに

本稿では、コーパスの実例に基づき、話し言葉「って」の分類と記述を試みたが、最後に日本語教育の観点からまとめる。4章でも見たように、話し言葉「って」における提題用法は、【引用】【連体詞】に次いで使用頻度が高く、置き換えパターンが複数存在する。そのため、日本語学習者が理解するためのポイントを提示することが必要であると考えられる。提示ポイントは以下の4点である。まず一つ目として、【提題】の「って」において、「何」が後接する疑問文の場合の「って」は、「とは」の置き換えとして用いられることを提示する。二つ目は、動詞や形容詞などの「文としての性質をもつもの」に接続する「って」の場合は、「というのは」に由来するものであるという点である。さらに三つ目として、「これ」「それ」などの指示詞や、人称代名詞や人名などの人を指し示す場合といった「特定されたもの」に接続する際の「って」は、「は」が置き換えられたものであると提示することが必要である。最後に、「って」に動詞「ある」「いる」が後接する場合には、「が」の置き換えとして「って」が用いられることについても補足的に理解を促すことを提案する。

参考文献

- 岩男考哲 (2003) 「引用文の性質から見た発話「～ッテ。」について」『日本語文法』3-2, 日本語文法学会, pp.146-162.
- 許夏玲 (1999) 「文末の「って」の意味と談話機能」『日本語教育』101, 日本語教育学会, pp.81-90.
- グループジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 三枝令子 (2015) 『語形から意味へ—機能中心主義へのアンチテーゼ—』くろしお出版
- 丹羽哲也 (1994) 「主題提示の「って」と引用」『人文研究』46-2, 大阪市立大学文学部, pp.79-109.
- 朴序敬 (2002) 「主題提示としての「ッテ」の談話機能—人称代名詞に後接する「ッテ」—」『ことばの科学』15, 名古屋大学言語文化研究会, pp.113-133.
- 朴序敬 (2006) 「「って」の許容度—1992年と2003年の調査結果から—」『ことばの科学』19, 名古屋大学言語文化研究会, pp.113-128.
- 藤村逸子 (1993) 「わからないコトバ, わからないモノ—「って」の用法をめぐって—」『言語文化論集』14-2, 名古屋大学言語文化研究会, pp.45-56.
- 牧典子 (1996) 「「って」—その成立と現在の使用傾向について—」『熊本大学留学生センター紀要』1, 熊本大学留学生センター, pp.97-109.
- 森重敏 (1954) 「「て, って」「てば, ってば」「たら, ったら」について」京都大学文学部国語学国文学研究室 (編) 『国語国文』23-11, 臨川書店, pp.579-590.
- 守時なぎさ (1994) 「話しことばにおける文末表現『ッテ』について」『筑波応用言語学研究』1, 筑波大学, pp.87-99.
- 湯沢幸吉郎 (1957) 『増訂—江戸言葉の研究—』明治書院

劉志偉（2023）「学習者にとって厄介な「って」」『埼玉新聞』（2023年7月28日掲載）

参考データ

コーパス検索アプリケーション「中納言」ver2.7.0 国立国語研究所『日本語日常会話コーパス』（<https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/search>）2022年12月5日検索

謝辞

本稿は福建師範大学外国語学院で開催された「2023年日本学国際シンポジウムおよび大学院生学術フォーラム」（2023年5月27日）での口頭発表に基づくものです。席上、またその他の機会にご意見、ご助言を賜った皆様に心より感謝申し上げます。また、本稿をなすにあたって指導教官である埼玉大学の劉志偉先生から熱心なご指導を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

尾藤眞裕（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
藤本珠笛（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

植民地期台湾における二重否定形式の当為表現について —『全国小学児童綴方展覧会』（1936）採録「綴方」を対象として—

上出 大河

【キーワード】

植民地期台湾, 日本語教育史, 当為表現, 義務表現, 『全国小学児童綴方展覧会』

【要旨】

本稿は植民地期台湾における言語状況の一端を明らかにすべく, 台湾児童の「綴方」に見える二重否定形式の当為表現について調査を行うことを主眼とする。植民地期台湾には, 台湾にルーツを有し非母語話者的な性質を持つ本島人と内地にルーツを有し母語話者的な性質を持つ内地人がそれぞれ居住していたという背景を踏まえ, 『全国小学児童綴方展覧会』（1936）採録「綴方」を本島系児童, 内地系児童に分類して調査を行った。調査結果からは, 本島系児童の方が内地系児童と比較して二重否定形式の当為表現を多用する傾向がある一方, 本島系児童には後項部省略形式の使用が確認されない, といった特徴が明らかになった。また, 同時代における内地の用例や現代の台湾系日本語学習者の用例等を踏まえれば, 前項部「ナケレバ」+後項部「ナラナイ」が最も多用される形式であり, この点については母語話者及び台湾系日本語学習者の通時的特徴と見られるという点等を明らかにした。

1. はじめに

本稿で取り上げるのは, 植民地期台湾における以下のような二重否定形式の当為表現である。

- a. なければならない
- b. なければならぬ
- c. なければいけない
- d. なくてはならない
- e. なくてはならぬ
- f. くてはいけない
- g. ねばならない
- h. ねばならぬ
- i. ねばいけない 等

なお、当為表現としては「べきだ」や「～方がいい」等を含む場合があるが、ここではさしあたり二重否定形式の当為表現のみを対象とする。また、ほぼ同様の内容を「当為的モダリティ」や「義務（の）表現」等と呼称する例もあるが、本稿では「当為表現」という用語を採用する。

現代の日本語教育では「なければならない」のような表現文型は初級段階で導入される基礎的な文型であるが、管見の限りこれまで日本語教育黎明期の非母語話者によるこれらの文型が分析された例は見当たらないようである。そこで本稿では、日本語教育黎明期である植民地期の台湾において、このような二重否定形式の当為表現がどのようなヴァリエーションをもって使用されていたのかという点を中心に記述し、当時の言語状況の一端を明らかにすることを試みたい。

また、分析にあたっては非母語話者の用例と母語話者の用例を対照すべく本島系児童と内地系児童¹に分けて用例を列挙し、また通時的視座を持ち込むべく現代日本語学習者の用例との対照も行う。

資料としては『全国小学児童綴方展覧会』（1936）を用いる。

2. 先行研究について

2-1 日本語学領域

当為表現を対象とした嚆矢的な研究は田中（1967）、田中（1969）である。田中（1967）は江戸語から東京語に至るまでの形式上の変化に着目し、前項部「ねば」が「なければ」「なくては」に変化していったことについて記述的に論じている。

その後の研究は田中（1967）に示された問題意識を引き継ぎつつ、帝国議会議事速記録に見える当為表現を調査した諸星（1986）や江戸期以降の後項部の展開に着目した渋谷（1988）、現代においては「なければ+ならない」という形式が代表的であるとした山西（2001）、当為表現の前項部と後項部のヴァリエーションとその結合状況について時代と地域性という観点から総合的に論じた湯浅（2019）等が代表的である。その他にも方言的要素に着目した寺川（1984）や前田（2016）等一定の蓄積が存在するが、日本語学領域における研究では、日本語非母語話者の用例について触れているものは見当たらない。

2-2 日本語教育領域

当為表現は日本語教育領域では「義務表現」、「義務を表す表現文型」と呼称されることが多い。日本語能力試験（Japanese-Language Proficiency Test）では「なければならない」が N4 レベル相当の文型とされており、日本語教科書でもその周辺の表現も含めて初級段階に配置されるのが一般的である。

¹ 植民地期台湾では、台湾在住の内地出身者を「内地人」、内地にルーツを持たない台湾出身者を「本島人」と呼称した。なお、「一系児童」との語を用いるのは、本稿における分類があくまで氏名によるものでしかなく、確定的ではないためである。

小西（2008）は主な初級日本語教科書に提示されている義務表現の文型を調査し、「なければなりません」が最も多く、次いで「なくてははいけません」「なくちゃいけません」が多く見られることを明らかにした。また、日本語教育史的な観点からは諸星（2010）が松本亀次郎編著の日本語教科書類の調査を行った例や伊藤（2017）による近代日本語教科書を対象とした調査等が存在し、それぞれ近代日本語史の知見を日本語教育史領域の分析に活用するという手法を採用している。

日本語非母語話者による二重否定形式の当為表現の使用実態について調査した先行研究としては遠藤（2010）が挙げられる。遠藤（2010）は「インタビュー形式の話し言葉コーパス」を用いて日本語母語話者と日本語非母語話者の用例に形式上の分布の差異が生じていることを明らかにし「なければならぬ」形式に偏る非母語話者の性質に「初級文型の硬直化」としての性質を見出している。

母語話者と非母語話者の運用上の差異について教育を通じて是正すべきものとしている点で遠藤（2010）と本稿は立場を異にする²わけであるが、非母語話者による当為表現の用例に着目するという点で本稿は遠藤（2010）と問題意識を共有するものである。遠藤（2010）によって示された共時的な傾向に通時的観点からの知見を加えることで日本語非母語話者の当為表現使用の史的な展開の一端を明らかにするのが本稿の一義的な課題である。

3. 資料について

本稿で主な調査資料とするのは美島近一郎の編纂による『全国小学児童綴方展覧会』（1936）採録の台湾児童の「綴方」である。

『全国小学児童綴方展覧会』には台湾の他にも朝鮮等の児童による「綴方」が採録されているが、台湾が日本にとって最長の統治期間を有す地域であること等を踏まえ、ここでは台湾児童の「綴方」に絞って調査を行うものとする。

同書の資料価値については上出（2023）に詳述したため、ここで振り返ることはしないが母語話者ならびに非母語話者の用例がそれぞれ一定の分量をもって採録されているという点で近代日本語史、日本語教育史上の重大な資料であることは明白である。

植民地期台湾にあつては日本語母語話者的な性質を有す内地人と日本語非母語話者的な性質を有す本島人とが共生しており、本稿ではそのような性質を踏まえて内地系児童、本島系児童の用例をそれぞれ提示することとしたい。

遠藤（2010）に報告されたような特徴と『全国小学児童綴方展覧会』採録本島系児童「綴方」に見られる用例の対照から日本語非母語話者の用例の通時的対照を行うとともに、当時の内地系児童、本島系児童の差異にも着目することで共時的な母語話者と非母

² 非母語話者の言語運用になんらかの特徴が見出されたとしても、それを直ちに是正すべき特徴とみなす立場に本稿は与しない。表現意図の伝達レベルで齟齬を産み出さない限りそれは正当な言語権の行使であると考えため、本稿ではあくまで「特徴」「差異」としてニュートラルに記述するという姿勢を採用したい。

話し者の言語運用の差異にも目を向けることとしたい。

以上、本稿はこのような分析に耐えうる資料として『全国小学児童綴方展覧会』を採用するものである。

表1 『全国小学児童展覧会』採録「綴方」数（単位：本）

	尋1	尋2	尋3	尋4	尋5	尋6	高1	高2	合計
内地系	10	13	21	26	24	12	1	0	107
本島系	5	20	16	30	36	35	7	5	154
合計	15	33	37	56	60	47	8	5	261

4. 資料に見える用例

4-1 用例の量的な分布

以下、『全国小学児童綴方展覧会』採録「綴方」に見える台湾児童の当為表現の用例数を表2として提示する。

表2 『全国小学児童展覧会』採録「綴方」に見える二重否定形式の当為表現数

	尋1	尋2	尋3	尋4	尋5	尋6	高1	高2	合計
内地系	0	0	3	0	2	4	0	0	9
本島系	0	4	3	0	8	7	4	0	26
合計	0	4	6	0	10	11	4	0	35

用例数のみを見れば、常に本島系児童の用例数が内地系児童の用例数を上回っている。

採録「綴方」の量的な差異を考慮して「綴方」一本あたりの用例数を算出しても両者ともに用例が見えない尋1、尋4、高2と内地系の用例数が僅かに本島系を上回る尋6以外の学年で本島系児童の用例数が内地系児童の用例数を上回っている。

ここからは、植民地期台湾においては本島系児童の方が内地系児童よりも二重否定形式の当為表現を多用していた可能性がある、と考えることができるが、内地系児童の「綴方」は高2のものが未採録であるため高1以降内地系児童の用例数が実質的に優勢になる可能性については否定できない。この点については他の資料を用いた追加調査等で更なる検証が必要であろう。

4-2 用例列挙及び分析

以下、内地系児童と本島系児童の二重否定形式の当為表現の用例を出現数が多い形式から列挙する。

なお、ここでは特に後項部についてデスマス形式と非デスマス形式で別項目を立てていない。

【内地系児童】

「ナケレバナラナイ」

- (1) 又先生にも大へん御苦勞をかけなければなりません (尋 6)
- (2) 試験をしてゐる時も時間がくるとやめてけいこをしなければなりません (尋 6)
- (3) 試合の日が近づくとつれてどうしてもかたなければならないと思ふやうになります (尋 6)

「(後項部省略)」

- (4) 向ふの座敷ではもうそろそろ話がをはりそうな頃だと思ふと、早くしなければと思つてあわてる (尋 3)
- (5) 「お母さん、もしばいどくだつたらどうなるの」「入院しなければ— (尋 6)

「ナイトイケナイ」

- (6) 私たちは一生けんめいにべんきやうをしてえらい人にならないといけないと思います (尋 3)

「ネバナラナイ」

- (7) お正月近くなつて来たので、年賀じようを出さねばならないと考へながら (尋 3)

「ネバナラン」

- (8) 今年こそは一生けんめい勉強せねばならんと考へてゐるうちにすつかり支たくは出来たので (尋 5)

「ネバナラヌ」

- (9) 男二人であるから大きくなつてからも互に助け合つて行かねばならぬ (尋 5)

【本島系児童】

「ナケレバナラナイ」

- (10) 庄長になるには、一しやうけんめいにおべんきやうしなければなりません (尋 2)
- (11) えらい人になるには、おやや先生のいひつけをまもつておりこうにしなければなりません (尋 2)
- (12) 時々水もやらなければなりません (尋 3)
- (13) 時間が来たので、やむを得ず別れなければなりません (尋 5)
- (14) 先づ敵の脅威を受けなければならぬのは、僕等が台湾だ (尋 5)
- (15) 掃除は女にとっては殊に大切なことで、小さい時から人よりきれいずきで、また働くことはほこりとしなければならぬ (尋 5)
- (16) 忠君愛国の精神を心にとどめなければなりません (高 1)
- (17) 我が国勢を世界にひびきわたらせ我が名誉をいつも残さなければなりません (高 1)

「ネバナラヌ」

- (18) 私はこれから、先生のおつしやることをよく聞かねばならぬと思ひました (尋 3)
- (19) どんなにほひがするかしらんと心配してゐた時も過ぎて、愈々飲まねばならぬ時となつた (尋 6)

「ナケレバナラヌ」

- (20) 又少しでも空地があつたら沢山植えなければならぬと思ひました (尋 5)
- (21) 少しの空地にでも、植樹しなければならぬと心にしつかり誓ひました (尋 5)

「ネバナラナイ」

- (22) 自分の身体を大事にするのと同じやうに森林を愛護せねばならぬ (尋 6)
- (23) 私の楽しみといへば、先づ日曜と言わねばならぬでせう (尋 6)

「ナクテハイケナイ」

- (24) その帽子はらいねんまでかぶるのですよ。それぐらゐなくてはいけないよとおつしやいました (尋 2)

「ネバイケナイ」

- (25) お母さんは「それは姉さんにもあげねばいけません。二人ともいやしんぼうね」といつて (尋 3)

「ナクテハナラナイ」

- (26) よくしんぼうして今の家のために働かなくてはならぬ (尋 5)

上記列挙した用例を前項部と後項部の結合状況という観点から表にすると以下表 3, 表 4 のようになる。

表 3 内地系児童の「綴方」に見える当為表現形式の前項部後項部結合状況

	ナラナイ	イケナイ	ナラン	ナラヌ	(後項部省略)
ナケレバ	3				2
ナイト		1			
ネバ	1		1	1	

表 4 本島系児童の「綴方」に見える当為表現形式の前項部後項部結合状況

	ナラナイ	イケナイ	ナラヌ
ナケレバ	17		2
ナクテハ	1	1	
ネバ	2	1	2

内地系, 本島系ともに最も多用される前項部は「ナケレバ」, 後項部は「ナラナイ」であり, これらを組み合わせた「ナケレバナラナイ」の表現形式が最も多く確認された。これは形式選択上「ナケレバナラナイ」が優勢になるという点で小西 (2008), 遠藤 (2010) の指摘する現代日本語母語話者, 現代日本語学習者と類似の傾向が植民地期台湾においても認められたことを示している。最も多用される表現形式が内地系, 本島系で同じであることを踏まえれば, 植民地期台湾におけるもっとも基礎的な当為表現として「ナケレバナラナイ」が存在したと見てよいであろう。

しかし, 内地系, 本島系の当為表現形式のヴァリエーションは完全に一致するわけではない。前項部「ナイト」は内地系でのみ確認でき, また「ナクテハ」は本島系にのみ確認される。また「ナル」を用いる後項部では内地系に「ナラン」「ナラヌ」が見られる一方, 本島系には「ナラン」は確認されない。『日本国語大辞典第二版』の「ぬ」の項目に「終止形・連体形は, 話し言葉では「ん」の形で使われることが多い」とあるようにこれらは必ずしも異質なものではないが, 否定辞の撥音便は西日本を中心とした各方言の特徴として広く知られているため, 西日本出身者が多数を占めたという内地人の特徴がこのような箇所に出ているものと捉えることもできよう。

また, この点については採録数の問題で偶発的に生じた特徴である可能性も否定できないが, 後項部省略形式の使用の有無についても触れる必要があるだろう。(4), (5) は後項部が省略されているが, 文脈から「ならない」「いけない」等を補うことは容易であり, 充分当為表現形式の一種と見ることができる。湯浅 (2007: 21) は後項部省略形式について「後項部が省略されても一種連語の自然らしさ, 規範性が確立した裏付け」と捉える見方を表明している。このような指摘を踏まえるのであれば, 後項部省略形式が

内地系児童の「綴方」にのみ確認できるのは、「連語の自然らしさ、規範性」の認識が本島系児童には希薄だったためと考えることも可能である。日本語母語話者の性質を有す内地系児童と日本語非母語話者の性質を有す本島系児童との間の差異がこのような形で表出している可能性は高いと見てよいであろう。

次に遠藤（2010）の指摘する「初級文型の硬直化」と類似する傾向が植民地期台湾における本島系児童にも見られるか否か、という点について検討する。

まず確認しておかなければならないが、遠藤（2010）の述べる「初級文型の硬直化」とは、あくまで現代における日本語教育・日本語教科書における「初級」を前提とする概念であり、その点で植民地期台湾とは前提が異なる。本稿では遠藤（2010）が、学習初期に習得した形式以外の形式に注意が向かなくなるという学習上の性質を「初級文型の硬直化」と呼称していることを踏まえ、低学年段階から用例が確認できる形式（その段階において既に習得済みであったと思われる形式）が形式選択上常に優勢となるのか、という点について調査を行うものとする。したがって本稿における「初級文型の硬直化」と類似する傾向とはあくまで「類似」であって遠藤（2010）の示す内容と完全に一致するものではないということについては申し添えておきたい。

『全国小学児童綴方展覧会』採録の本島系児童「綴方」に確認できる当為表現形式のヴァリエーションは①ナケレバナラナイ、②ネバナラヌ、③ネバナラナイ、④ナクテハイケナイ、⑤ネバイケナイ、⑥ナクテハナラナイの6種である。

以上の6種の当為表現のうち最も多用されるのは先述の通り「ナケレバナラナイ」であるが、これが低学年段階から継続して多く用いられていたのであれば、遠藤（2010）の述べるような「初級文型の硬直化」と類似する傾向が当時から確認されたものと見てよいであろう。

以下、表5に本島系児童による各当為表現形式の用例の学年別の分布を示す。

表5 本島系児童の「綴方」に見える各当為表現形式の学年別分布

	尋1	尋2	尋3	尋4	尋5	尋6	高1	高2	合計
ナケレバナラナイ		3	1		5	4	4		17
ネバナラヌ			1			1			2
ナケレバナラヌ					2				2
ネバナラナイ						2			2
ナクテハイケナイ		1							1
ネバイケナイ			1						1
ナクテハナラナイ					1				1
合計	0	4	3	0	8	7	4	0	26

表5からは、最初に当為表現形式が確認される尋2から高1まで一貫して「ナケレバナラナイ」が多用されていることがうかがえる。この点を見れば現代日本語学習者の用例に関する遠藤（2010）の指摘（「初級文型の硬直化」）と類似の傾向が植民地期台湾においても確認された可能性が高いことがうかがえる。

では日本語母語話者の性質を有す内地系児童の場合はどうであったか、以下表6として示す。

表6 内地系児童の「綴方」に見える各当為表現形式の学年別分布

	尋1	尋2	尋3	尋4	尋5	尋6	高1	高2	合計
ナケレバナラナイ						3			3
ナケレバ			1			1			2
ナイトイケナイ			1						1
ネバナラナイ			1						1
ネバナラン					1				1
ネバナラヌ					1				1
合計	0	0	3	0	2	4	0	0	9

用例数自体が本島系児童と比べて少量であるため、あくまでも大まかな傾向として慎重に判断する必要があるが、本島系児童の場合とは様子が異なり低学年段階から用例が確認できる形式がその後も多用され続けるという傾向は認め難いようである。そもそも低学年に「ナケレバナラナイ」の用例が確認できないほか、学年によって用いられる当為表現形式が異なっているようにも見える。

5. 現代台湾系学習者及び同時代の内地における用例との対照

通時的観点から本島系児童の用例の特徴を導き出すため、本節ではI-JASに採録されている現代台湾系日本語学習者の当為表現について、特に表現形式のヴァリエーションという観点から記述する。

用例の検索にあたっては文字列検索を行い、それぞれ検索文字列として「なければならぬ」「なくてはいけない」等を入力した。

以下表7として、確認された当為表現のヴァリエーションと用例数を示す。なお、表中の用例数の括弧内の数字はデスマス形式の用例数である。

表7 現代台湾系学習者の当為表現形式のヴァリエーションと用例数

ナケレバナラナイ	40 (18)
ナキヤイケナイ	5 (1)
ナキヤナラナイ	3 (0)
ナクテハナラナイ	3 (2)
ナクテハイケナイ	2 (1)
ナクチャイケナイ	1 (1)
合計	54 (23)

「ナケレバナラナイ」

- (27) あでもゲームする時必ず，親に，聞かなければならない (CCS40-I)
 (28) その授業の準備を，しなければならぬんです (CCT16-RP1)

「ナキヤイケナイ」

- (29) 健康診断受けなさいけないんです (CCT39-I)
 (30) レポートとかも書かなさいけないので (CCS40-RP1)

「ナキヤナラナイ」

- (31) えーと遠いなのでけっこう朝，とても早い起きなさいならないので (CCS52-I)
 (32) 単語覚えなさいならないとかじゃなくて (CCS04-I)

「ナクテハナラナイ」

- (33) 自炊しなくてはなりません (CCS58-I)
 (34) 毎日，えー，じたくしなくてはなりません (CCS58-I)

「ナクテハイケナイ」

- (35) 卒業のために，いろんなことを準備しなくてははいけませんので (CCS26-RP1)
 (36) 他の，所の人は家にいなくてははいけないんですが (CCT26-I)

「ナクチャイケナイ」

- (37) あー，準備しなくちゃいけませんです (CCS26-I)

『全国小学児童綴方展覧会』に見える当為表現との比較という観点でいえば最も注目
 に値するのは，前項部における縮約形の使用の有無ということになる³。

³ なお，このような特徴が，用例に口頭発話が多く含まれるという I-JAS の性質によるものである可能性は否定できない。『全国小学児童綴方展覧会』採録「綴方」との比較という点

『全国小学児童綴方展覧会』採録の台湾児童の「綴方」には、縮約形「ナキヤ」「ナクチャ」の使用が内地系、本島系ともに見られないが、「次世代デジタルライブラリー」を利用し「国立国会図書館デジタルコレクション」で公開されている同時代（1930年代）の用例を調査したところ、以下表8に示した通り、内地では一定の用例が見られる表現であったことがうかがえる⁴。以下、表7と同様に括弧内の数字はデスマス形式の用例数である。

表8 「国立国会図書館デジタルコレクション」に見える
1930年代の縮約形前項部を含む当為表現の用例数

ナクチャナラナイ	525 (101)
ナクチャナラヌ	357 (0)
ナクチャイケナイ	311 (70)
ナキヤナラナイ	279 (63)
ナキヤイケナイ	99 (28)
ナキヤナラヌ	58 (1)
合計	1629 (263)

「ナクチャナラナイ」

- (38) 斯様な理由でバナマ運河を掘らなくちやならない、斯う云ふことになつた
(関根郡平『軍縮問題と帝国の使命』1935年)

「ナクチャナラヌ」

- (39) 封建制度がなくなれば武士も徹底的にやられなくちやならぬ
(三浦参玄洞『マルキシズムの宗教否定と仏教徒』1930年)

「ナクチャイケナイ」

- (40) 明さんもお父様に負けない様な、立派な人にならなくちやいけませんのよ
(片桐竜子『久遠の愛』1938年)

「ナキヤナラナイ」

- (41) 厭な雨だつて、降らなきやならないから、神様が降るのをお許しになつたんでせうよ
(野辺地天馬『うるはしき朝』1932年)

ではデータの性質を揃えるため作文資料を調査することが必要となるが、この点については国立国語研究所で現在構築中の「日本語学習者横断作文コーパス (W-CoLeJa)」の公開を待って追加調査を行うことを予定している。

⁴ 最終閲覧日 2024年2月8日。

「ナキヤイケナイ」

(42) だが、用心しなきやいけないよ、東京は怖ろしい都会だ

(加藤武雄『大東京の屋根の下』1933年)

「ナキヤナラヌ」

(43) 立法者は占有を与へることができないことになり、与へれば例外だとしなきやならぬ

(岩田新『占有理論』1932年)

当為表現の前項部縮約形の使用は、現代台湾系学習者の用例としても、同時代の用例としても一定数確認される⁵。縮約形の使用が植民地期台湾児童の「綴方」に見られないという特徴がどのような要因によって生じたものであるのかという点については未だ不明であるが、『全国小学児童綴方展覧会』採録の内地の「綴方」には「オカアサンノイフコトヲキカナキヤイケナイ」(東京・尋1)、「大じにしなくちやいけませんよ」(島根・尋2)のように縮約形の使用が見られることから、当時から縮約系が少なくとも内地の児童には使用されていたこと、同書の採録方針によって縮約系が排除されていたわけではないことが明らかである。ただし『全国小学児童綴方展覧会』1～5巻に採録された台湾を除く地域に在住する児童の「綴方」に見える縮約系の用例数の全体⁶を見ても縮約系の使用は僅少であり、縮約系の不使用を植民地期台湾における特徴として処理してよいかという点については少なからぬ疑問が残る。ここではあくまで植民地期台湾における児童にそのような特徴が存在した可能性があるという点について指摘するに留めたい。

縮約系の使用の有無など疑問の残る点もあるが、二重否定形式の当為表現の中で「ナケレバナラナイ」が突出して多く用いられるという傾向については通時的な観点からも確認できるため、これは日本語母語話者及び台湾系日本語学習者の通時的特徴と見てよいであろう。

6. まとめ

以下、本稿において明らかになったと思われる5点を記述しまとめる。

⁵ 同様に「次世代デジタルライブラリー」を使用して「なければならない」の1930年代の用例を検索したところ「なければなりません」4052例を含め20607例の用例が確認される。この点からは、同時代の内地において前項部縮約形の用例は一定数認められるものの非縮約形の用例数には及ばない用例数であったことが認められる。

⁶ 『全国小学児童綴方展覧会』1～5巻に見える非台湾在住児童の前項部縮約系の用例は「ナキヤナラナイ」1例「ナキヤイケナイ」1例「ナクチャイケナイ」1例「ナクチャナンメ」1例「ナキヤイケン」1例に留まり、非縮約系「なければならない」369例「なければいけない」59例等と比較すれば極めて僅少である。

- 一、用例の分布を踏まえれば、植民地期台湾において本島系児童の方が内地系児童よりも二重否定形式の当為表現を多用していた可能性がある。
- 二、内地系児童、本島系児童ともに最も多用される前項部は「ナケレバ」、後項部は「ナラナイ」であった。
- 三、本島系児童の「綴方」に後項部省略形式の当為表現は確認されない。これは湯浅（2007：21）の指摘する「連語の自然らしさ、規範性」の認識が本島系児童には希薄だったことによる可能性がある。
- 四、遠藤（2010）の指摘する「初級文型の硬直化」の特徴は、学習初期段階から一貫した「ナケレバナラナイ」使用という形で植民地期台湾における本島系児童にも類似の傾向が確認される。
- 五、「ナケレバナラナイ」が多用されるという傾向は現代台湾系学習者にも類似の傾向が見られるため、通時的な特徴とみることができる。また、同時代の内地や現代台湾系学習者の用例としては確認される前項部縮約形は内地系児童を含め植民地期台湾系児童の用例としては確認されない。

その他、当時の教科書類における導入の順序や台湾人作家の手によるテキスト中に見られる用例を対象して調査を行うことで、植民地台湾における二重否定形式の当為表現の実態についてより詳細な検討が可能になるものと期待されるが、これについては稿者の今後の課題としたい。

参考文献

- 伊藤孝行（2017）『近代日本語史に見る教育・人・ことばの交流 日本語を母語としない学習者向け教科書を通して』大空社出版
- 遠藤直子（2010）「インタビュー形式の発話における日本語学習者の義務表現使用について－「初級文型の硬直化」の観点から」『早稲田日本語教育学』, pp.83-95.
- 上出大河（2023）『「全国小学児童綴方展覧会」の資料価値－日本語教育史研究及び近代日本語研究領域における活用に向けて－』『日本語教育史研究』2号, pp18-30.
- 小西円（2008）「実態調査から見た「義務の表現」のバリエーションとその出現状況」『日本語教育』138号, pp.73-82.
- 渋谷勝己（1988）「東京語の当為表現－後部要素イケナイの成立を中心に－」『大阪大学日本学報』, pp.99-118.
- 田中章夫（1967）「江戸語・東京語における当為表現の変遷」『国語と国文学』 pp.102-114.
- 田中章夫（1969）「近代東京語の当為表現」『佐伯梅友博士古希記念国語学論集』表現社
- 寺川みち子（1984）「尾張方言の当為表現－ンナランとナカン」『徳島文理大学文学論叢』
- 中島利郎（2005）『日本統治期台湾文学小辞典』緑蔭書房
- 前田桂子（2016）「肥前方言の当為表現ンバの推移について－方言書および方言調査を手がかりに－」『国語と教育』41号, pp.203-215.

諸星美智直（1986）「国語資料としての帝国議会議事速記録－当為表現の場合－」『國學院大學大学院紀要-文学研究科-』第17輯，pp.217-251.

諸星美智直（2010）「松本亀次郎編著の日本語教科書類における当為表現の扱い」『言語文化研究』9号，pp.51-67.

山西正子（2001）「現代語における当為表現」『目白大学人文学部紀要』7号，pp.110-120.

湯浅彩央（2007）「国語教科書における当為表現の変化－明治から昭和二〇年代にかけて－」『論究日本文学』86巻，pp.13-26.

湯浅彩央（2019）『近代日本語の当為表現』武蔵野書院

使用データ

国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』

(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search> 最終閲覧日 2024年2月8日)

国立国会図書館『次世代デジタルライブラリー』

(<https://lab.ndl.go.jp/dl/> 最終閲覧日 2024年2月8日)

上出大河（國學院大學大学院文学研究科博士後期課程）

出会いの旅 友好の絆

—福建師範大学・埼玉大学学生文化交流活動イベント—

黒川美那子・庄佩珍・陳燕青

【キーワード】

日本語教育実習，福建師範大学大学，中国，福州

【要旨】

本稿は，2024年3月に福建師範大学で行われた教育実習をきっかけとした一連の文化交流イベントに関する報告である。中国での日本語教育の実態を観察したり，様々な新しい体験をしたりすることによって，相互理解を深めてよい収穫を得られた。

1. はじめに

2024年3月4日から16日まで，中国福建省福州市にある福建師範大学外国語学院で2週間にわたる教育実習をきっかけに，福建師範大学・埼玉大学学生文化交流イベントが行われた。当イベントは教育実習，文化交流と福州見学という三つの内容から成っている。



図1 初日集合写真

2. 教育実習

今回の教育実習に参加したのは埼玉大学の安倍千晴さん、高橋あすみさん、梶日和さんと飯田来未さんという4名の学部生である。福建師範大学外国語学院日本語学科の授業見学し、それらを参考に実際に授業を行うのが主な目的である。教育実習は、授業見学、授業の実践、反省会に分かれている。

実習生達は「基礎日本語」、「日本語会話」、「日本語読解」、「日本語聴解」、「異文化コミュニケーション」、「日本語文学概論」など10科目以上の授業を聴講し、中国の大学における日本語教育の現状を直接観察した感想として、「日本語母語話者、非母語話者の教師のそれぞれに異なった強みと役割があることを間近に感じられた。海外で実習を行えたからこそ得られる気づきだった」や「常に学習者が気になるであろうところや間違いやすいところを先にくみ取って、生徒に寄り添うように進める技術はまさに『プロの技』であり、このような聴講の機会でしか得ることができない収穫であった」、「緊張感とリラックスのバランスが保てるようにテンポを意識し、空間の雰囲気にも気を配ること、また、生徒の反応を敏感にキャッチし、理解と学習意欲を高めていくことの重要性を学んだ。教師と学習者がお互いに歩み寄りながら、『知識』を自分の言葉として発信できるように導く過程を観察できたことは、これから学習を続けていくにあたっての基盤になっていく」、「どの授業においても生徒たちの主体的な発話が意識されており、学習者の誤用や疑問として残りやすい事項にも触れることができたのは、私たちに新たな視点を与えてくれた」などと語ってくれた。

11日と13日の午前中、四人の実習生はそれぞれ学部一年生と二年生を対象に授業を行った。梶日和さんと安倍さんは『日本語会話』を担当し、高橋さんと飯田さんは『日本語基礎作文』を担当した。実習の指導教員からは、次のようなコメントがあった。

- (1) 時間の使い方が上手で、イントネーションの確認や文法の説明なども十分に行っていた。全ての要点を抑えつつ、時間通りに授業を終わらせていたため、一度しか模擬授業をしたことがないとは思えないほど、とても完成度の高い授業だった。
- (2) 作文テーマ（「自分へのご褒美」）は、学生のニーズを踏まえて設定されていた。スライド教材は、学生の興味を引き付け、作文執筆へのモチベーションが上がるよう十分な工夫がなされていた。授業の流れや時間配分など、授業計画も十分に練られていた。
- (3) 全体的に楽しい雰囲気以学生と頻繁にインターアクションを取り、発言を促しながら授業を進めていた。発話スピードや使用語彙等が学生のレベルに合っており、指示も明確に伝わっていた。そのため、普段は発言しないような学生も、積極的に発言していた。ペアワークでは、適宜各ペアの話に加わりながら、丁寧に机間巡視を行っていた。授業後は、授業で回収した作文を積極的に添削し、その難しさを実感したようだった。

- (4) 学生からの授業評価も非常に高く、授業後に行ったアンケートでは、全体的な授業の難易度については、86.5%の学生が「ちょうど良かった」、PPT や黒板の見やすさについては91.9%の学生が「とても見やすかった」を回答していた。また、「作文テーマは、私たちの状況に合っている。自分がしたいことが書けて本当に良かった」「どうすればこの作文がより具体的に書けるのか、すぐに理解できた」「授業は面白かった。(実習生が)例として自分の体験を話してくれたのもよかった」などの声もアンケートに寄せられていた。



図2 模擬授業風景その1



図3 模擬授業風景その2

13日の午後、教育実習報告会が行われた。埼玉大学の実習生はそれぞれ教育実習の状況について報告し、貴重な経験を得られたと感想を述べた。受講生として、福建師範大学日本語学科の学生代表の王子露さんと黄宇昊さんが、実習生の授業に対し、内容、面白さ、授業の雰囲気などの面での感想を述べた。続いて、福建師範大学日本語学科の庄佩珍先生、黒川美那子先生と廣瀬先生による授業コメントが行われた。授業準備の大変さ、生徒のニーズに応じたテーマ決めや授業ペースの把握の難しさがあったにもかかわらずそれをよく乗り越えられた実習生を高く評価し、今後教師としての道を目指すにあたり有益な助言を行った。今度の実習を通して、言葉の教育とは言葉を育むだけではなく、人と人とのコミュニケーションの上に成り立つ温かい真心が大切であるという共通の認識にたどり着いた。最後に、学科長の陳燕青先生は、今回のイベントは中日両国の大学生の絆を一層深め、相互理解を促進する点で重要な意義を持つものとし、中国で見たことや感じたことを帰国後日本の友人にも共有してほしいと総括を行った。





図4 交流会風景

3. 文化交流

教育実習のほかに、福建師範大学日本語学科の「藤山日本学サロン」、日本語コーナーや閩琉エイサーチームの練習など沢山の文化交流活動にも参加した。

6日に開催された「第60回の藤山日本学サロン」では、「中日の大学生活」、「福文化・和文化」という二つのテーマをについてそれぞれ発表した。埼玉大学の安倍千晴さん、高橋あすみさん、梶日和さんと飯田来未さんは日本各地の特色ある文化や大学の生活などを紹介し、福建師範大学の李宏宇さん、何雨軒さん、黄宇昊さん、許若琳さんは多彩な大学生活、福州の有名な観光スポット、福州グルメ、福建師範大学外国語学院日本語学科の看板活動エイサーなどを紹介した。最後に、出席した陳建梅先生、廣瀬裕作先生、小柳圭先生と黒川先生は自分の感想も交えながらコメントした。





図5 第60回の藤山日本学サロン風景

13日の午後、日本語学科の看板サークルである閩瓊エイサーチームに招待され、エイサーチームのメンバーと一緒にエイサー体験をした。何度も福建省のエイサー大会で優勝した福建師範大学の閩瓊エイサーチームのメンバーは、名曲の『一笑懸命』と

『唐船ドーイ』を披露した。沖縄出身の飯田さんも仲間に入り、皆で楽しんでいた。最後に、「お疲れさまでした」という一言でその日の練習を終えた。



図6 エイサー練習風景

同じ夜、日本語コーナーにも参加した。日本語学科の学生達と共にゲームをしたり、自分の日常生活や経験を共有したりすることで、言葉の勉強はもちろんお互いの距離感が一層縮まった。



図7 日本語コーナーの風景

4. 福州見学

放課後には、李宏宇さん、何雨軒さん、白丽莎さん、陳琪さんという4人のチューターの案内のもと、福建師範大学の隣にある有名な夜市である「学生街」、新キャンパス、福州の有名な観光スポットである「三坊七巷」「煙台山」「西湖公園」などを散策し、中国のおおらかな雰囲気と緑豊かで美しい街並みを肌で感じた。

4日の夜、皆で一緒に学生街に向かい、焼き冷麺や芋泥餅などの有名な軽食を食べ、輪投げ、シューティングゲームなどの面白いゲームなどを体験した。実習生は、大学の周辺にはその他の教育機関や学生向けのお店が並んでいることに驚いていたと同時に、学生たちがこの土地の中心になっているような活気のある雰囲気も感じた。また、ライチ肉や魚団子など福州の伝統料理などを食べ、日本では味わえない多種多様な本場の中華料理に魅了されていた。



図8 大学近辺の見学

9日に福州の郊外にある新キャンパスをも見学した。チューターが広いキャンパスを散策しながら、福建師範大学の歴史、学部の構成など紹介してくれたおかげで、実習生は大学の歴史の重みを感じていた。

10日、福州の名所と言われる「三坊七巷」に足を運び、福州ならではの「福文化」を感じた。そして、有名な翻訳家である「嚴復」記念館を見学し、実習生は福建が中国の近代史に残る偉人を輩出したことに思わず驚きと感心の声を上げた。また、様々なお茶の店で福建のお茶を味わい、日本と異なる茶文化を体験した。実習生は、福州の有名なジャスミン茶を大変気に入り、お土産として福州名産のジャスミン茶やジャスミンのお菓子を購入していた。昼には、日本人教師と一緒に「老福州」という老舗で南煎肝（レバーの炒め物）、紫菜炸海蛎（カキの磯辺揚げ）、炒白粿（餅の炒め物）など福州の特色ある料理を味わい、埼玉大学の友人たちから絶賛の声が上がった。





図9 福州市内見学

5. おわりに

一連の交流イベントを通して、埼玉大学と福建師範大学の学生達は多くのかげがえない時間を一緒に過ごした。両国文化の違いはもちろん、中国の特色ある風土を肌で感じられたことは、お互いの人生において大切な思い出として刻まれていくであろう。互いに学び合う中で理解を深め、絆を強めていきながら成長していくこそが今回の文化交流イベントの意義あるところなのではないだろうか。



図10 お別れの記念写真

黒川美那子(福建師範大学外国語学院日本語学科常勤講師)
庄佩珍(福建師範大学外国語学院日本語学科講師)
陳燕青(福建師範大学外国語学院日本語学科准教授・学科長)

2023 年度海外日本語教育実習報告

—福建師範大学での教育実習に参加して—

飯田来未・安倍千晴・梶日和・高橋あすみ

【キーワード】

日本語教育実習，異文化交流，福建師範大学，中華人民共和国，福州

【要旨】

本稿は，2024年3月3日から3月16日にかけて行われた海外日本語教育実習の実習報告である。本実習は，中華人民共和国の福建省福州市にある福建師範大学で行われ，埼玉大学より4名の学生が参加した。約2週間の実習報告と共に，現地での生活や文化交流について，実習に参加した4名それぞれの所感をもとに振り返る。

1. 飯田来未

今回の実習では，日本語教育に関する知見を広げることができ，加えて，中国の文化についても新たな視点を得ることができた。まず，現地の文化の面について，今回の体験を通して一番に感じていることは，メディアや人から聞いた情報に惑わされずに，現地へ赴き，自分の目で見て感じることの重要性である。中国に行く前は，多くの人から，「危ないから気を付けて」や「食文化が違うから保存食を持って行って」のように，中国に



図1 福建師範大学の皆様との集合写真

対してネガティブな情報が多くあった。しかし，実際に中国に行ってみると，人は優しく，これは主観もあるが食べ物は美味しく，衛生面もしっかりしていた。人から聞く情報を信じて，偏見や思い込みで勝手なイメージを抱くのではなく，実際に自分で体験することの価値や重要性を認識した。日本における中国に関するニュースは，政治的なものや大規模な事故や事件などが多く，ネガティブな印象を持ちやすい。そのため，まずは中国に対する偏見から生まれるイメージを解消できるように，SNS等を用いながら，

実際の中国を発信していきたいと思う。また、その際、私自身の偏見や思い込みが含まれないように、私自身の主観から生まれた感情や意見は述べず、ありのままの事実だけを提示して、受け手自身がそれぞれ感じられるようにしたいと思う。周りの意見や考えに惑わされずに、自身がどう感じるかがとても大切だと実感した2週間だった。

日本語教育の面に関しては、実際の教育現場を見ることで、今まで持つことのできていなかった多くの視野を身に着けることができた。ここで身に着けた日本語学習者と接するときの観点や姿勢は、実践の面において日本社会に還元していこうと思う。知識は実践的な場面で使用してこそ、価値があると強く感じた。私は現在、特別養護老人ホームで働くベトナム人スタッフ2名に日本語ボランティアとして日本語のサポートを行っている。その現場において、今回の会話や作文、文法などの授業を観察して学んだことを活かしたサポートを行っていきたい。会話、作文、文法、それぞれの授業で重点を置くポイントは異なり、授業内容によって、話すスピードや教材なども変化していた。ニーズに合わせ、どのようなレベルで、何を目的とした活動で、目標は何なのかを明確にしながら、サポートを行っていきたいと思う。今回得られた経験や知識は、他のどのような座学よりも価値があり、私に強い印象を与えるものだった。将来的には、今回の経験やこれからの大学での学びを統合し、今回出会った先生方のように第一線で活躍する日本語教員になりたいと思う。

2. 安倍千晴

私たちは実習中毎日4コマずつ様々な種類の授業を聴講させていただいた。伸ばす能力や目的によって異なる指導方法と授業構成があるという点、日本語教師には文化的背景や語に含まれた日本的考え方を教える役割もあるという点は実習でしか得られない気づきだったと感じている。また、そのような授業が持つ異なった役割や目標と併せて、先生方自身のキャラクターやオーラそのものも指導方法の武器となって授業に活かしていることを実感した。日本語母語話者、非母語話者の教師のそれぞれに違った強みと役割があることを間近に感じられたのも、海外で実習を行えたからこそ分かる学びである。加えて、大学の授業では学ぶことのできない要素の一つとして、「生徒の様子に合わせて対応する瞬発力」もある。常に学習者が気になるであろうところや間違いやすいところを先にくみ取って、生徒に寄り添うように進める技術はまさに「プロの技」であり、間近に拝見できたことは聴講での大きな収



図2 「日本語会話Ⅱ」の教壇実習①

穫だった。緊張感とリラックスのバランスが保てるようにテンポを意識し、空間の雰囲気にも気を配ること。生徒の反応を敏感にキャッチして理解と学習意欲を引き出していくこと。教師と学習者がお互いに歩み寄りながら、「知識」を自分の言葉として発信できるようにさせていく過程を観察できたことは、これから学習を続けていくにあたっての基盤になっていくと思う。また、どの授業においても生徒たちの主体的な発話が意識されており、学習者の誤用や疑問として残りやすい事項にも触れることができたのは、私たちに新たな視点を与えてくれたと感じている。そして何より、模擬授業の製作と実施をプロのご指導のもと行えたことはなかなか得られない貴重な収穫であり、財産である。これまで大学の授業では説明的な文法指導にこだわった細かな授業構成を学んできた。模擬授業も日本語母語話者に対して行っているからか、予め用意した教案に沿って進めるだけの無機質なものになることが多かったように思える。今回実際の現場を体験したり、授業の内外で非母語話者との日本語交流を行えたことで、日本語教育とは人と人とのコミュニケーションの上に成り立つ、温かくて生きた学びなのだとすることを気付かされた。今後はそのような意識のもとでどのように日本語学習者と向き合うべきか、といった考え方の面から大きく変えてインプットに偏らない生きた学びを提供できる教師を目指し、学習を続けていきたいと考えている。この実習期間を通して、リアルな日本語教育の現場での教育内容と学習者の実態を自分の目で見て、聞いて、体験することができた。生徒のみなさんからいただいた刺激やパワーを原動力として気持ち新たに、今回の学びを来年度以降の授業内で共有・活用していくなどして成長の糧としていきたいと思う。

3. 梶日和

今回の実習では、海外での日本語教育の現場を初めて自分の目で見る事ができた。どの授業も学生との会話の中で成り立つものであり、言語の学習には、人と話す機会が最も重要であるということが実感できた。中国の学生は非常に学習意欲が高く、学びに対する積極性が見られた。毎朝早くから授業が始まり、夕方まで授業がある中、多くの宿題や予習をこなしている学生の姿は、見習うべきものだと感じた。また、学生がみな寮生活ということもあり、学生同士の結びつきが非常に高いのも印象的だった。キャンパスの周りには多くの店があり、学生を中心に町がつくられていた。特に大学のすぐ近くの学生街では、毎晩多くの学生が夕食や買い物を楽しんでいた。福州で暮らす人々は人に対して優しいのが特徴で、学生だけでなく、お店の店員さんやホテルの



図3 「日本語会話Ⅱ」の教壇実習②

スタッフさんなども、中国語がわからない私たちに親身になって接してくれた。2 週間の福州での生活は、そのような優しい福州の人たちの人情に支えられたものであると感じている。

日本語教育という学びの面で言うと、日本人・中国人教師の両方を含む、さまざまな授業を聴講できたことは、私にとって非常に大きな収穫であったと思う。それぞれの教師にそれぞれのスタイルがあり、授業の進め方はかなり異なるものだった。今後は各授業のメリットやデメリットを整理し、自分にはどのようなスタイルがあっているのかを模索していきたいと思う。日本で模擬授業を行ったときは、日本人を相手としていたため、どうしても実際の環境が想像できなかった。しかし実際に日本語学習者を相手に授業をしてみると、自分の言っていることがしっかり伝わっているか、全員が授業についてこられているかなど、常に意識しながら授業を進めなければならないということを身にしみて感じた。今後は、実際に授業をしたときに感じたこのような感覚を忘れずに、日本語教育を学んでいきたい。また、今回の実習に参加した者として、実習に参加していない他の学生にも、実習で得た学びを伝えていく必要があると思う。そして異文化の理解や、海外での日本語教育に関する学びを深めていきたい。

4. 高橋あすみ

異国で聞いた日本語の授業は私に日本語の面白さや価値を再度強く実感させた。普段日本で暮らしていると、日本語の様々な表現で溢れた生活が当たり前で、日常会話で使う一つ一つの語彙や表現がどのような由来から来ているものなのか、どんな日本特有の価値観や文化に関わりその表現が生まれたのかなどを意識する機会は少ない。しかし日本語学習者の学生と同じ目線に立ち、初めてその日本語と対峙するように授業を聞いてみると、常用日本語に隠された文化的な由来や意味を発見することができ、よく知っているはずの日本語が非常に新鮮なものに感じた。実習する以前の私のように、(知性を持つようになってから)日本語に初めて出会うという経験をしておらず、私が今回の実習で学んだ日本語の側面に気づいていない日本人も多いと思う。SNS で発信したり、語学系の交流会などがあれば積極的に参加し、日本語のあまり認知されていない側面を伝える発表や活動を行っていきたい。



図 4 文化交流の場での日本の文化紹介の様子

謝辞

本実習の実施に際して、国際交流基金令和5年度大学連携日本語パートナーズ派遣プログラムと埼玉大学教養学部学部長裁量経費による助成を頂きました。そして、実習生を快く迎え入れ、両学生間の交流の機会を多く設けてくださった福建師範大学外国語学院の皆様に対して、心からお礼申し上げます。特に、実習中に熱心にご指導くださった庄佩珍先生、黒川美那子先生、多くのご支援をいただいた陳燕青先生、蔡妍先生には、感謝の念に堪えません。加えて、実習中の生活をサポートし、多くの福建省の文化を体験させてくださったチューターの陳琪さん、白麗莎さん、李宏宇さん、何雨軒さんにも大変お世話になりました。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

飯田来未（埼玉大学教養学部2年生）

安倍千晴（埼玉大学教養学部2年生）

梶日和（埼玉大学教養学部2年生）

高橋あすみ（埼玉大学教養学部3年生）

2023 年度海外日本語教育実習報告

— 浙江工商大学での実習を通して —

藤本珠笛・尾藤眞裕

【キーワード】

日本語教育実習，浙江工商大学，中国，杭州

【要旨】

本稿は，2024 年 3 月に浙江工商大学で行われた日本語教育実習の実習報告である。約 1 週間の実習報告とともに，中国での生活について振り返る。本実習では，海外での日本語教育の実態や日本と中国での大学生活の違いなどについて観察することができ，多くの学びを得ることができた。

1. はじめに

本稿は，2024 年 3 月 4 日から 3 月 10 日にかけて実施された海外日本語教育実習の実習報告である。中華人民共和国の浙江省杭州市にある浙江工商大学で実施された本実習には，埼玉大学人文社会科学研究科から 2 名の学生が参加した。

実習先の浙江工商大学東方語言与哲学学院は，日本語専攻・アラビア語専攻・哲学専攻の 3 つの学科が属している。そのうち，日本語専攻に所属している学生は全体で約 200 名おり，今回の実習では日本語専攻の学部生の授業に参加した。また，1 クラスあたりの学生数は 30 名程度で構成されている。



図 1 杭州市の様子



図 2 浙江工商大学キャンパスの様子

2. 実習報告

本実習は、週末・移動日を除いた計 4 日間で実施した。以下の表 1 に実習スケジュールを示す。1 コマあたり 90 分の授業で、1 限は 8:05～9:35 まで、2 限は 9:50～11:25 まで、3 限は 13:40～15:20 までである。2 限だけ 95 分となっているのは途中 5 分間の休憩があるためである。また、表 1 において同一の授業が複数みられるが、これは同授業における異なるクラスの授業に参加したためである。

各授業は浙江工商大学のネイティブ日本語教師とノンネイティブ教師を中心に進められ、私たち実習生は授業観察を行いながら、適宜授業に参加するという形式であった。また、実習最終日である 3 月 8 日の「日本語視聴説」では、実習生による教壇実習の時間が設けられた。

表 1 実習スケジュール

日付	午前	午後
3 月 5 日 (火)	8:05～9:35 通訳理論と実践 (日本語) 9:50～11:25 通訳理論と実践 (日本語)	13:40～15:20 通訳理論と実践 (日本語)
3 月 6 日 (水)	8:05～9:35 基礎日本語 2 9:50～11:25 基礎日本語 2	13:40～15:20 交流会
3 月 7 日 (木)	8:05～9:35 日本語会話実訓 9:50～11:25 日本語視聴説	
3 月 8 日 (金)	8:05～9:35 日本語視聴説 9:50～11:25 日本語視聴説	

3. 授業報告

以下では、実習日ごとにその日の実習内容について振り返る。3-1 から 3-4 では 4 日間の実習における授業及び交流会についての記述を行う。また、3-5 では授業以外の生活の場面において印象深かった点について述べることとする。

3-1 2024年3月5日（火）

初日は、学部3年生の「通訳理論と実践（日本語）」の授業に参加した。この日の授業は2部構成で、①教員が読み上げる日本語のテキストを学生が中国語に翻訳する活動と、②日本語雑誌である『人民中国』を読み、中国語に翻訳する活動の2つであった。

①は、教員が日本語を読み上げ、学生はテキストを見ずに聞き取ったキーワードをもとに中国語に翻訳するものである。1文ずつ学生を指名し、翻訳させる形式で授業が進められていた。今回の授業では、日本の年中行事をテーマにした文章を扱っていた。教員は端午の節句について等、中国の文化と日本の文化を比較しながら理解できるように説明していた。

そして②の活動は、教員が『人民中国』のテキストを配布し、学生がAIによる音声を聴きながら空欄になっている部分を埋めて文章を完成させるものであった。その後、指名された学生が日本語文を読み、1文ずつ中国語に翻訳する形で授業が進められていた。このように、この授業では、今まで学習した日本語の文法知識を生かしてどう運用するかという点に重点が置かれている印象を受けた。3年生の授業であるため、取り扱っているテキストの内容もかなりレベルの高いものを感じられたが、教員は単語や表現を1文ごとに噛み砕いて中国語で解説し、テキストの内容に関する質問を投げかけて内容理解の確認なども行っていた。また、AIによる音声とネイティブスピーカーの発話音声の違いが大きいことを踏まえ、今回の授業のようなAIによる音声だけでなく、ネイティブスピーカーの会話を録音し、その音声を使用して授業を行うこともあるというお話も伺った。



図3 「通訳理論と実践（日本語）」の様子

3-2 2024年3月6日（水）

2日目の午前中は、学部1年生の「基礎日本語2」の授業に参加した。授業開始10分前に教室に向かうと、授業開始前にもかかわらず、既に多くの学生がCDの音声に続いてその日の授業の新出語を復唱したり、読み上げられるテキスト本文の音声を聞いたりして事前学習をしていた。そして授業が始まると、学生たちはスマートフォンを取り出し、出席登録をアプリで行っていた。

この日の授業の内容は、①担当学生によるプレゼンテーションと、②教員による文法項目の説明、そして③教科書の文章についての教員による解説の大きく3つに分かれていた。

まず、①では「中国と日本の大都市の紹介、または夜景の紹介」というテーマで、学

生が2人1組でプレゼンテーションを行っていた。これは、週ごとに提示されるテーマに沿った会話文を学生が作成し、対話形式でプレゼンテーションを行うというものである。発表では、杭州と東京の都市の違いやユネスコ世界文化遺産である杭州西湖についての紹介などがあり、中にはPowerPointを使ってプレゼンテーションを行う学生もいた。学生の発表が終わると、そのプレゼンテーションの中で使われた日本語の表現を取り上げ、教員から学生に対して発表内容に関する質問をしたり、内容理解のための補足説明をしたりする様子が見られた。この授業のメインは、後述する②③の文法項目の学習だと思われるが、このようなロールプレイで会話練習を行い、既習の表現を使って自ら会話文を考え、会話の流れを作ることで日本語の運用能力や談話能力の向上を図っているように感じられた。



図4 「基礎日本語2」の様子

次に、②ではテキスト『日語総合教程（第2冊）』を使った新しい文法項目の説明があった。ノンネイティブ教師によって説明は全て中国語で伝えられ、今回の授業は「～らしい」「～ように見える」「～中（ちゅう／じゅう）」という3つの文法項目に関する内容であった。学習項目と類似する既習表現についての補足や例文中に出てくる活用形の確認、日本文化に関する単語の解説などを中国語で1つ1つ丁寧に説明していた。また、学生を指名し、テキストの日本語の表現を中国語に翻訳させる場面が多く見られた。

そして、③ではテキストの第2課の文章について教員から中国語で説明があった。学生にテキストの日本語を中国語に翻訳させる活動が中心であり、文法項目を正しく理解した上で、日本語を中国語に正しく翻訳することができるかを重視しているという印象を受けた。

2日目の午後は、交流会に参加した。浙江工商大学からは日本語を専攻している学部1年生から大学院生までの約30名が参加した。私たちは自己紹介とともに出身地、大学院での生活、研究内容についてのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの後にはQ&Aの時間が設けられたが、浙江工商大学の学生からは、「日本での大学生活にはどのくらい費用がかかるのか」「日本ではどんなアルバイトをしているのか」



図5 交流会の様子

といった質問が多く、日本での学生生活に関心を持っている学生が多い印象であった。また、日中の電車での過ごし方の違いについてなど、文化の違いに関する質問もみられた。上級生や大学院生になると、日本語のレベルが非常に高く、使用語彙のコントロールをあまり意識せずともスムーズな会話が行えた。授業では会えない学生たちとも交流することができ、有意義な時間を過ごせた。

3-3 2024年3月7日（木）

実習3日目の午前には、「日本語会話実訓」「日本語視聴説」の2つの授業に参加した。これらの授業は、ネイティブ日本語教師が担当している。まず、1限目の「日本語会話実訓」は、学部2年生が受講する選択科目の授業である。授業のはじめに学生1人1人の名前を呼んで出席をとった後、学生とのフリートークが始まった。「元気ですか」など学生自身のことについて、イエス・ノーで答えられるクローズド・クエスチョンから徐々に



図6 「日本語会話実訓」の様子

に「どうして元気ですか」「朝何時に起きましたか」のようなオープン・クエスチョンへと展開させていた。また、この日は「ハンカチ」「ネクタイ」のような身につけるものについて、レアリアを使った提示質問を行い、単語を引き出していた。このようなフリートークは、自然な会話に慣れることを目的として行っているようで、学生たちも教員の問いかけに対して楽しげに反応しており、リラックスできている様子だった。

この日の学習テーマは「数字の読み方」についてであったが、日付や時間、人数などさまざまな形での数字を提示し、PowerPointを使って日本語の数の数え方や数字の位などについて学んでいた。連濁や促音便化が起こる日本語の数字の読みだが、2年生ということもあってかスムーズに読める学生も多かった。ネイティブ日本語教師による授業は、基本的に直接法による説明であったが、時折中国語の単語を用いながら理解できるように説明していた。また、この学習パートでは会話を楽しむことを目的としており、こまめに学生を指名して発話の機会を与えたり、中国語での言い方を学生に教えてもらったりして話題を広げ、会話をしながら学生の興味を惹くように工夫されていた。

授業の後半は、本来は『基礎日本語口语教程②』のテキストを使った実践練習に充てられるが、この日は全16回の授業のうち2回目の授業であったため、授業に関する説明が行われた。「正しく話すより楽しく話すこと」「生活や文化に興味を持つこと」などを授業目的として掲げており、授業全体を通して学生たちが楽しみながら日常会話について学ぶことを意識しているように感じられた。

2限目の「日本語視聴説」の授業は、学部1年生の会話の授業である。授業の全体的

な流れは1限目の「日本語会話実訓」と同様であったが、この授業では「アルファベット」について取り上げていた。アルファベットの日本語的発音や「PC (パソコン)」などの略語、「@ (アットマーク)」のような記号の読み方を通して、カタカナの学習を行った。日本語学習者においてアルファベットはもちろん、「ラジオ」のような英語由来のカタカナ語を英語的発音で発するケースは少なくないことから、日本語的発音について学ぶことも日本語を上達させるうえで必要なことだと感じた。

3-4 2024年3月8日(金)

実習最後の4日目は、学部1年生の「日本語視聴説」の授業において、前日の授業内容を参考に教壇実習を行った。まず、はじめに教員が通常の授業通りにフリートークを行った。この日は身につけるものの提示質問に加え、それらの単語を聞き取り、学生に黒板に記すように促していた。学生たちは、書き取りを行うことで改めてひらがな・カタカナの確認をすることができ、さまざまな方法で定着のための学習がなされていると感じた。



図7 「日本語視聴説」の教壇実習の様子

その後、教員と交代し、前日同様に学習テーマである「アルファベット」についての教壇実習を実施した。今回のアルファベットのような初歩的な学習では、練習が機械的で単調になりやすいため、話題を膨らませて雑談をしたり、個々に指名して発話機会を作ったりするなど、学生の意識を向けさせるための工夫が難しかった。まだ1年生であるため、習得状況にも個人差があったが、こちらの問いかけに対する反応が良く、積極的に授業に参加する姿勢がみられた。また、わからない学生がいた場合でも周りの学生が助けてあげたり、スマートフォンを使って調べたりして、能動的にクラス全体で学習しているような印象を受けた。

この授業の後半では、テキスト『日語解析』を使用して、対話練習の部分を中心に学習することになっている。単語や文法等については、ほかの授業でノンネイティブ教師が担当しているようで、知識的な学習はノンネイティブ教師による中国語を使った学習で勉強し、実践的な会話学習は自然な日本語を扱えるネイティブ日本語教師が担うというように役割分担がされているようだった。また、この授業では自然なコミュニケーションと自分自身の日本語能力向上を目的とする点から、学生にAIツールを使わないように指示していた。実習1日目の「通訳理論と実践(日本語)」の授業では、AIによる音声での聞き取り学習を行っており、それによる生の日本語音声の聞き取りにくさを教員が危惧していたが、ネイティブスピーカーが十分ではない学習環境の中でのAIとの付き合い方について、教員たちも模索しているように感じられた。

3-5 授業以外について

ここでは、実習中の生活の中で特に印象に残った点について4点取り上げたい。

まず、1点目は浙江工商大学、杭州市がアジア競技大会の影響を大きく受けている点である。2023年9月23日から10月8日にかけて第19回アジア競技大会（杭州アジア大会）が開催され、大会開催に向けて杭州市内の高速道路や地下鉄、空港等のインフラが整備された。私たち実習生も空港から大学に向かう際に地下鉄を利用したが、清潔で、行き先や時刻表示も分かり易く、利用しやすいという印象を受けた。浙江工商大学の学生や教員たちも、アジア競技大会のおかげで便利になったと話しており、その恩恵を受けているようだった。



図8 地下鉄の行き先表示



図9 地下鉄車内の様子

地下鉄の改札口前では荷物検査が行われており、荷物をX線検査機に通す必要があった。日本の鉄道ではなかなか見られない光景ではあるが、このようなセキュリティチェックは、アジア競技大会という大規模なイベントを開催するうえで安全性を確保するための重要な役割を果たしていたと思われる。

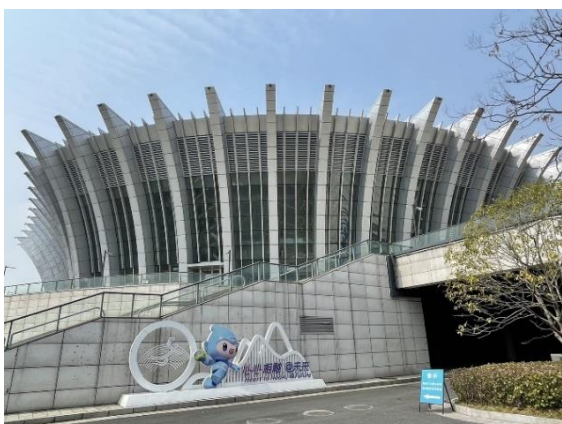


図10 浙江工商大学の体育館（正面）

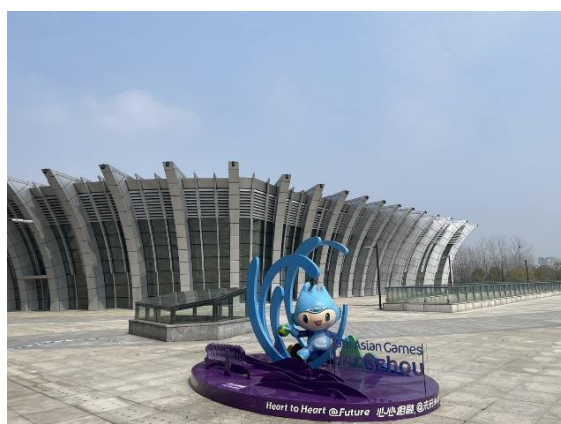


図11 浙江工商大学の体育館（ロビー）

また、実習先の浙江工商大学の体育館も、アジア競技大会の際にハンドボールの競技会場として使用されたものである。図10, 11はその体育館の写真である。

実習期間の時点でも、杭州アジア大会の公式マスコットの1人である「宸宸（チェンチェン）」が会場前に飾られており、アジア競技大会の面影が残されていた。

続いて、2点目は大学内の移動手段についてである。多くの学生は大学構内を徒歩か自転車、または電動バイクで移動していた。中でも、自転車やバイクでの移動の多さが印象的であった。図12のように駐輪場には多くの自転車が停められており、そのほとんどがシェアバイクであった。シェアバイクに付いているQRコードを読み取って料金を支払うシステムで、走行距離に関わらず1回1.5円で乗ることができる。また、図13の駐車場の様子からも分かるように、電動バイクを利用する学生も多かった。



図12 駐輪場の様子（自転車）



図13 駐車場の様子（電動バイク）

3点目は、「开水房」と呼ばれる大学内でお湯を汲む場所についてである。大学内では、水筒を持ち歩いて开水房でお湯を入れる学生が多く見られた。図14のように、2限の授業の合間に設けられている5分休憩の際に、学生が开水房に並んで長い列を成している光景が印象的であった。

最後に、4点目として挙げるのはデジタル化の普及についてである。キャッシュレス化が進んでいることはもちろんだが、飲食店ではテーブルにメニュー表が置かれておらず、卓上に貼られたQRコードをスマートフォンで読み取ることで、メニューの閲覧から注文、支払いまでの一通りの手順を済ませることができるようになっているところが多かった。また、飲食店やホテルではAIロボットが導入されており、配膳などの業務の一部をこなしていた。3.の授業報告でも、授業の出席登録アプリやAIの使用について触れたが、日常生活のあらゆる場面でデジタル技術を活用していることが窺えた。



図14 开水房に並ぶ学生の様子

4. おわりに

本稿では、浙江工商大学での海外日本語教育実習における実習内容についてと、中国の生活を体験して感じたことについての報告を行った。本実習では、日本語教育に関してはもちろん、文化的な側面についても日本にいただけでは気付くことのなかった事柄に触れることができた。日本語教育の面では、海外でも日本に興味を持ち、日本語を学ぼうとしている学習者が多く存在することを知ることができた。本実習を通して多くの日本語学習者と交流することができたが、その背後には彼らの学習をサポートする日本語教師たちの支えがあるのだということに、改めて気付かされた。現在、浙江工商大学に在籍しているネイティブ日本語教師は1名のみであり、ネイティブ日本語教師が不足している現状が垣間見える。今後、海外で日本語を学ぶ学習者への支援やネイティブ日本語教師への負担などの課題についても考えていく必要があると感じた。

また、中国での生活面では、中国の多くの方々の優しさに触れることができた。大学内では先生方やチューターの学生が、中国語がほとんど理解できない私たち実習生のために常に行動を共にして手助けをしてくださった。大学構内の案内や食事面など、ありとあらゆるサポートをしてくださったおかげで、無事に本実習を終えることができた。また、大学外でも、キャッシュレス化が進んだ中国で現金しか所持していない私たちのために、近隣のお店をまわってお釣りの現金を用意してくださった方や、ことばが伝わらなくても丁寧に対応してくださった親切なお店の方々に巡り合うことができた。このようなご支援のもと、充実した1週間を送れたことに心から感謝を申し上げたい。また、私たち自身が実際に訪れて体験して気付いたこのような事柄を、今後も多くの埼玉大学生に実感してもらえるように、海外日本語教育実習プログラムによる交流が末永く続いていくことを願いたい。

謝辞

本実習の実施に際して、2023年度教養学部・人文社会科学研究科学際系多文化キャンパス事業の助成を頂きました。そして、実習生を快く受け入れてくださった浙江工商大学東方語言与哲学学院に対して、心より感謝申し上げます。加えて、実習中に多大なるご支援をいただいた浙江工商大学の丁之群先生、曾昭駿先生、呉毓華先生、加百慎平先生に謝意を申し上げます。最後に、チューターの劉欣雨さん、沈巧穎さんにも実習中の生活全般をサポートしていただき、大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

藤本珠笛（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

尾藤眞裕（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

2023 年度研究大会

2023 年度研究大会は、以下の通りである。

- (1) 日時：2023 年 12 月 16 日（土）
- (2) 時間：12 時 30 分～17 時 50 分
- (3) 実施方法：ハイブリッド開催
- (4) 研究大会の進行：司会：井上直美，李兮然
1 名の発表時間＝発表 35 分＋質疑 25 分

①石井千晶（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

「非可能性判断の「カモ」「カモデス」の使用傾向についての考察」

②田村隆夫（埼玉大学博士後期課程修了）

「主要部内在型関係節と持ち主の受け身」

③陳冬姝/徐静萱（北京外国語大学講師/北京外国語大学大学院）

「ChatGPT に関する中日メディアの報道研究—批判的談話分析を方法論として—」

④蔡妍（福建師範大学准教授）

「中国人日本語学習者「ものだ」の習得状況に対する考察

—理解と産出の視点に基づいて—」

ご講演 中俣尚己（大阪大学准教授）

話題別コーパスが拓く日本語・日本語教育研究

非可能性判断「カモ」「カモデス」の使用傾向についての考察

石井千晶（埼玉大学人文社会科学部研究科博士前期課程）

ここ近年感情文の「変です」「嬉しい」に「カモシレナイ」を縮約した「カモ」や「カモデス」を付けて「うわっ、変かも」「これ（荷物）、ちょっと持ってくると嬉しいかもです。」のような表現形式がある。このような「カモ」「カモデス」の使われ方を本発表では非可能性判断と定義し、まず感情文に「カモシレマセン」「カモシレナイ」ではなく、「カモ」や「カモデス」が使用される傾向があるのか。次に感情文に「カモシレマセン」「カモシレナイ」ではなく、なぜ「カモ」「カモデス」を付けなければならないのか。というところに注目し発表を行った。一つめの発表目的では現代日本語書き言葉均衡コーパスで抽出した用例を用いて発表者が作成した分類表をもとに「カモ」「カモデス」が感情文において接続しやすいことを明らかにした。また、2つ目の目的では YouTube やドラマやテレビ番組など自然会話から抽出した例文を用いて「カモシレマセン」「カモシレナイ」と「カモ」「カモデス」の使用の違いを明らかにした。

主要部内在型関係節と持ち主の受身

田村隆夫（埼玉大学博士後期課程修了）

主要部内在型関係節構文の「の」の後に現れる格助詞は、通常(1)のように主節動詞が要求するものとなる。しかし、(2)では事情が異なる。

(1) 母がこの写真を捨てようとしたのを祖母が預かって、私に渡してくれました。

1999 津島 佑子(著) 私 新潮社

(2) なにしる十八年前の冬の朝、あの銀杏の木の下で捨てられて泣いていたのを、執事の玄英さまに拾われて養女にいただいた身ですもの。

1995 五木 寛之(著) 蓮如 中央公論社

これに関して、次の現象が注目される。同構文の(4)と持ち主の受身文の(3)からの「私」の主題化に、平行性が読み取れるのである。

(3) { 私の...カサが } 誰かに持って行かれた。
{ 私は カサを } 誰かに持って行かれた。

(4) { 私が...木の下に捨てられていたのが } 玄英さまに拾われた。
{ 私は 木の下に捨てられていたのを } 玄英さまに拾われた。

(5)(6)では、定型の持ち主の受身文が（ ）内を含めば同構文となる。両者には、「人や事物の動きや状態が「の」を伴う名詞節で表される（日本語記述文法研究会（編）6(2008:21)）」現象を介しての関係性が窺える。

(5) 私はカサ（をカサ立てに入れておいたの）を誰かに持って行かれた。

(6) 私はスリに財布（を身に付けていたの）を盗られた。

〈参考文献〉日本語記述文法研究会(編)6 第11部複文(2008) くろしお出版

ChatGPT に関する中日メディアの報道研究

—批判的談話分析を方法論として—

陳冬姝/徐静萱（北京外国語大学講師/北京外国語大学大学院生）

本発表は批判的談話分析を方法論として、ChatGPT に対する中日メディアの態度と認識を比較することを目的としたものである。研究対象は 2022 年 12 月から 2023 年 5 月まで中国の『澎湃新聞』と日本の『読売新聞』に掲載されている ChatGPT についての新聞記事（無料版）である。Cap(2013)が提出した近接化理論の STA モデル (Spatial-Temporal-Axiological) に基づき、中日メディアでは AI・ChatGPT に関する技術領域のもの (ODC) がそれぞれ空間的・時間的・価値観的にどのように人間世界 (IDC) に影響を与えていくのかを考察した結果、『澎湃新聞』は ODC の近接に注目し、ODC の近接を IDC に利益を与えるポジティブなものとして捉え、チャット GPT を代表とする人工知能は人間に利益をもたらす良いものであると読者を説得しようとしているのに対して、『読売新聞』は IDC が取っている措置に注目し、ODC の近接を IDC にリスクを生じるネガティブなものとして捉え、チャット GPT を代表とする人工知能は人間世界に危険を及ぼす可能性が高く、気を付けなければならないものであると読者を説得しようとしている、ということが明らかとなった。

中国人日本語学習者の『ものだ』の習得状況に対する考察

—理解と産出の視点に基づいて—

蔡妍（福建師範大学准教授）

本研究は、各用法について理解難易度と産出難易度の調査を行うことによって、中国人日本語学習者の「ものだ」の習得状況を考察した。

意味解釈問題（短文／長文）と四者択一問題からなる理解テストと、多肢選択式問題、談話完成問題と翻訳問題からなる産出テストを実施した。エントロピー加重法と線形加重和法を用いることによって、理解難易度を「本質＞当為＞感慨＞回想＞願望」に、産出難易度を「回想＞当為＞感慨＞願望＞本質」に算出した。また、対応のある t 検定によって、理解と産出とのギャップをも検証した。その結果、産出テストの得点に比べて、理解テストのほうが有意に低いことが明らかになった。

理解難易度の結果を見てみると、多義語の意味理解における学習者のカテゴリー形成が示唆される。意味カテゴリーの間には確立度と難易度の違いがみられると思われる。一方、各用法の産出難易度に関しては、その用法の典型性、教授順序、接触頻度に関わっている可能性が高い。産出レベルの習得効果が理解レベルを上回っていることは、学習者の産出能力の育成が有効であることを示した一方、今後は理解能力に対する育成、考察、測定をより一層強化していく必要があることをも示唆している。

さいたま言語研究会

【会則】

1. 名称

さいたま言語研究会と称する。

2. 目的

本研究会は埼玉大学を拠点とし、言語学・言語教育の分野において幅広く学術情報を交換・発信することを通して、包括的な言語研究の発展に資することを目的とする。

3. 活動内容

- (1) 年に1回（12月）、研究大会を開催する。
- (2) 年に1回（3月）、オンラインジャーナル（さいたま言語研究）を発行し、ホームページで公開する。
- (3) 年に数回、勉強会を開催する。

4. 運営委員（2023年度）

- (1) 顧問：小出慶一，仁科弘之
- (2) 世話役：金井勇人，川野靖子，劉志偉，鮮于媚
- (3) 幹事：蔡梅花
- (4) 勉強会：李兮然

【入会の手続き】

1. 入会希望の方は「入会申し込み」と明記した上、メールで以下の情報をお知らせ下さい。

- (1) 名前（漢字及びローマ字）
- (2) 住所
- (3) 電話番号
- (4) メールアドレス
- (5) 所属（学生ではない場合は勤務先）
- (6) 専攻分野

2. 本研究会では、年会費の徴収は行いません。ただし、研究大会の開催時に、参加者から参加費（500円）をいただきます。

『さいたま言語研究』

【投稿規定】

1. 投稿原稿の種類は、以下の3つとする。
 - (1) 研究論文：独創性と新規性があり、言語研究の進展に貢献する実証的もしくは理論的研究（14頁程度）。
 - (2) 研究ノート：言語研究を活性化させる契機となりうる知見や問題提起など（10頁程度）。
 - (3) 研究資料：言語研究に関する資料や情報など（8頁程度）。
 - (4) 解説論文：研究動向や研究トピックの解説など（8頁程度）。
2. 応募締切：毎年2月下旬
3. 提出先：saitamagengoken@gmail.com
4. 結果：査読・検討の上、投稿者には3月10日までに結果を連絡する。
5. 発行：毎年3月31日

さいたま言語研究 第8号

発行日 2024年3月31日
発行者 さいたま言語研究会
Homepage - <http://saitamagengoken.sakura.ne.jp/home/>
E-mail saitamagengoken@gmail.com

Saitama Gengo Kenkyu

vol.8

2024. 3